虹色の電撃姫～いやだからオレは……～

芦田貴彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
虹色の電撃姫～いやだからオレは……～

【Ｎコード】
Ｎ８３２４Ｗ

【作者名】
芦田貴彦

【あらすじ】
とあるおとぎ話に登場する英雄の少女。強力な魔法と剣技を持って世界を救ったとされるらしい。しかしまあ、おとぎ話。実際の話なわけがないのだ。魔法やら魔王やら、そんなのがいたわけがない。……と思っていたオレですが、考えを変えざるをえなくなりました。なんの因果か、魔法アタリマエの世界に強制参加させられて、あげくなんか知らないけどそっちの世界でオレは、その英雄様の体で戦う羽目になってしまった。しかも英雄様の体といっても、なんだかんだで十歳程度の女の子という始末……。そんな中、これは口酸っ

ぱく言っておきたい。いやだからオレは男だっての！　注；魔法アタリマエの世界といっても、現実世界の裏側という意味合いです。

序章（前書き）

自分の処女作であります。生でもいいので（と書いておいてなんですが、出来れば、生は……）温かい目で見ていただいたら幸いです。

序章

とあるおとぎ話に、こんな話がある。
はるか昔、突然世界に魔物と呼ばれる人外の凶悪な生き物たちが現れた。人々は魔物たちの強さに圧倒され、なす術なく滅びの一途をたどっていた。

しかし、人類は生き残った。魔物たちに対抗する力、『魔法』を手に入れたのである。魔法は、人類存続の切り札としてただちに体系化された。魔法を操るもの、『魔法使い』が世の中に当たり前のように現れ始めてから、人類の魔物への反攻が始まった。

人類は徐々に魔物を圧倒し始め、少しずつ自分たちの土地を取り戻していった。
だがあと少しというところで、人類は再び足を止めることになる。

魔物たちの王たる存在、『魔王』と呼ばれるものが現れたのだ。

魔王は自らが君臨する世界、魔界から次々と強力な魔物たちを呼び寄せ、自らも人間たちの世界を支配せんと殺戮を繰り返した。瞬く間に人類は危機に陥り、もはや絶滅も時間の問題であった。
しかし人類は、その危機をも乗り越えた。

『英雄』と称される一人の少女が、悪辣な魔王を滅ぼしたのである。

少女は、稀代の魔法使いであり、天才的な剣士でもあった。
その魔法は、異界の扉をも操り、
その両手の剣は、嵐のように敵を切り刻んだ。
魔王と互角に渡り合えたのは、彼女くらいなものであった。

彼女は別世界の王と死闘を繰り広げ、ついに打ち破ったのである。
……しかし魔王と激戦を繰り広げた彼女は、皆のところへ戻る間もなく、決戦の場で命を落とした。最後に魔界への扉を封印するという大魔法を行使して…。

最後にその英雄の名をお教えしよう。

彼女の名は、フルミナ・レーゲンという――

†††††

「グガァァァーーー！！」
民家ほどもある異形の生物が大音量で吠える。
「っ、うるせぇな！」
その足元で、一人の赤髪の少年が舌打ちしつつ、手に持った細身の槍を異形な生物の足元に突き刺す。すると異形な生物は悲鳴らしき雄叫びを上げ、後ろに退く。
「へへん、どんなもんだって―」

「悪いが踏むぞ」
赤髪の少年が自慢げに声を上げようとした後ろから、銀髪の青年が少年の背を踏み台にして高く飛翔する。
「っ～、いってーな！」
赤髪の少年は下から抗議の声を上げるが、青年は何事もなかったかのように少年の声を聞き流す。
「……さすがに頭には届かないか…」
青年は冷静に異形の生物を眺め、持っていた人の背ほどもある大剣を構える。
「はぁっ！」
そして掛け声とともに大剣を振り下ろす。大剣は深々と異形の生物

の腹部を切り裂き、そこから黒っぽい体液が噴き出した。青年は大剣を振り下ろした反動をうまく使いもう一太刀浴びせた後、異形の生物を踏み台にし、少年の元まで戻ってきた。

「なにすんだよ！」
帰ってきたところで、少年は青年に責め寄る。青年は素知らぬ顔で、
「そう怒るなって。ほらみろ、お前のおかげで大きな傷を負わせることができたぞ？」
「そーいう問題じゃねぇよ！」
即座に少年が言い返す。と、そこで二人は異形の生物の様子がおかしいことに気が付いた。

「さて、きたぞ」
青年が小さく笑みで口元をゆがめる。少年はあたりを見回し、岩のような大柄の少年を見つけると、手招きした。
「よし来い、出番だぜ！」
大柄の少年は一度うなずき、片手に壁のような重厚な盾を持ちながら少年たちの前に躍り出て、盾を構えた。
「グガァァァーーー！！」
異形の生物は口を開け一度上を向いた。すると口の端から炎が漏れる。どうやらブレスを吐くつもりのようだ。

そして彼らはそれを待っていた。
「頼むぜ旦那」
「…まか、せろ」
青年が盾の陰に隠れる。赤髪の少年もそれに続く。青年は小さく息を吐くと、近くの建物を見上げた。
「…さぁて、おいしいところを持っていくんだ。ちゃんと決めてくれよ」

†††††

「会長、敵がブレスの体勢になりました」
「そのようだね」
グラウンドで暴れる異形の生物を見下ろす校舎の屋上。そこには四人の人が戦況を見守っていた。そのなかで会長と呼ばれた全身黒一色の青年が「さて」と言って空を見上げる。時間的には深夜をまわっているので、月と星がきれいに見えた。

「うーん。今回はなかなかかかったね。もうちょっと早めに終わると思って、アニメの録画してないのになぁー」
ふう、とため息をつく。すると会長の横にいる、彼女らが通う高校の制服を着た青色の長い髪を持つ女性が、
「大丈夫です。別に見なくても死んだりしませんから」
若干とげを感じる口調で言った。会長は心外とばかりに肩をすくめて、

「いやー、わかってないね我らが副会長さん。アニメにはね、男のロマンが詰まっているのだよ。そして僕みたいなコアなファンは独自にMPなるものを持ってる。それがなくなると、生命の危機を迎えちゃうのさ」
「MPとは？」
「萌えポイント」
「……」
「……っあ、ちょっ、それで殴られると、い、いい痛い、かな～？」
会長は彼女の手から（いつの間にか）出てきた白い剣（ハリセンとも言いますな。……でも、普通のハリセンには金属光沢なんて、ないよなぁ）を見て、冷や汗を出し始めた。
副会長の女性は小さくため息をついて、さっとハリセンをしまう。
……というか消した。

「ふう……。まあそれはさておき。…ここが勝負どころだ。ここで確実に仕留めたい」
一度大きく息を吐いたが、その後会長はさっきとは違うまじめな表情で言う。
「先ほども言ったように、あれはブレスの後、体内の熱を放出するために首のあたりにあるえらを開く。そこがやつの弱点部位なんだ。かなり弱っている今なら、そこを的確に切り付ければ一撃で倒すことも可能だと思う。かなり高い位置にあるから、こうして上から奇襲をかける形になっているけど、君なら成功すると思うよ」

会長は屋上のへり近くに立っている、見た目小学生に見える――副会長と同じデザインの制服を着ているが――小柄な少女に向かっていった。その少女は、月の光を受けその光の加減で虹色に輝く不思議な金髪をしていた。その髪を肩甲骨のあたりで揺らしている少女は、レモン色の瞳で屋上から異形の生物を見下ろしながら、両手に持った二振りの剣を握りしめた。

…そのほおに、汗が一滴流れ落ちる。

「……大丈夫？」
と、小柄な少女のすぐ後ろから不安そうな声がもれる。小柄な少女がちらと背後を見ると、そこには淡い亜麻色の髪を長いポニーテイルしている少女がいた。ポニーテイルの少女は、小柄な少女がやろうとしていることを、本心ではやめさせたいと思っているのか、中途半端に片手を小柄な少女のほうにのばしている。しかしその様子を見て小柄な少女は逆に決心がついたようだ。小さく息を吐いて、
「……大丈夫だ。心配すんな」
小さな見た目同様に幼い声で、可憐な見た目に反し男勝りな口調で

話す。そのときグラウンドで異形の生物が熱線にも似たブレスを、大柄の少年が構える盾に向かって勢いよく放った。思わず顔をしかめたくなる熱風が校舎の屋上までふぶく。
だがブレスはすぐに止み、首元のえらが大きく開いた。

「今だ、フルミナ君！！」

会長が言い放つ。
「言われなくてもっ！」
小柄な少女―フルミナは言うや否や屋上のへりを力強く踏み切る。
「！？」
突然の上から奇襲に、異形の生物は慌てえらを閉じようとする。
だが、遅い。

「はあぁぁぁぁぁぁっ！！」

小さな英雄が、闇夜に輝く双剣の高速の二連撃で、的確に異形の生物の首をえらの口から切り落とした。異形の生物は、声を上げる暇もないまま首から上がずれ、頭が落下し始める。
同時に頭は、端から小さな粒子になり消えつつあった。残された胴体も同様に切られたところから光の粒子に変わる。

「よし、決まった！」
フルミナは、空中で勝ち鬨をあげる。
だが、ふと気づくことがあった。

いま、彼女は異形の生物の正面で自由落下している。彼女にとっては校舎ほどの高さから落下しても、彼女の持つ力のおかげ（あと、地獄のような理不尽な訓練のおかげ）で体勢を立て直し、着地することが可能なのでたいしたことはない。

問題は落下している場所だった。
異形の生物は決定的な傷を負い、消滅しつつあった。だが、その消滅は一瞬のことではない。早いペースではあるが、一瞬ではないのだ。
グラと、異形の生物が前のめりになり、力なく倒れ始めた。
他ならぬフルミナのほうに向かって。

「……え？」
言わせてもらえば、絶好のタイミングであった。
これならちょうどフルミナが着地したのと同時くらいに、地面に倒れ伏すことになりそうだ。

……もう一度言おう。彼らの消滅は一瞬ではない。
そして、消えるまではちゃんとした質量があるわけで。
それはつまり――

「って、やべぇつぶされる！？」
フルミナの額に冷や汗がうまれる。
「どど、どうしよ――」
その瞬間、フルミナは横から風のように割り込んできた何かに吹き飛ばされた。

「全く、お主は相変わらず詰めが甘いというか、間抜けであるな」
……と、思ったらなにかふさふさしたものの背に乗せられていた。
フルミナは、それがよく知ったものであることに気がつくと、ふて腐れたような顔をして、
「……なんだよ、今回は運が悪かっただけだろあれは」
「運なものか。何も考えず切り付けたお主が悪いわ」

「なにを――」とフルミナは、自分を背負っているものに文句を言おうとしたところ、そいつは背負った時と同じように、無遠慮にフルミナを異形の生物から離れたところにおろした。……というか落とした。

「ひぐっ。っつ～、……おい！」
フルミナはしりもちをついたような体勢で、そばにいる落とした当人を見上げた。
「ん、ああ悪いな。なにぶん我も急には止まれぬのだ」
悪びれた様子なしにそいつはしらっと答え、大きな振動を立てながら倒れ伏す異形の生物を眺めた。
フルミナの視線の先にいたのは、かなり大きな獅子であった。白と黒の美しい毛並みをしたその獅子が、フルミナを眺めながら口を開く。
「まあ、せっかく助けてやったのだ。礼を言え、とまでは言わぬ代わりに許せ」
獅子の口から流暢な人語が吐き出される。フルミナはそれに驚きもせず、うぅう……とうなりながら獅子をにらむ。

「おーい、大丈夫ぅー？」
とそこで、場違いなほどのんびりとした声が一人と一匹にかかる。
フルミナと獅子は同時に声のしたほうを振り返った。
「ああはい、大丈夫ですよ。……この白黒に振り落とされた以外は」
「あれくらい受け身が取れて当然だ」
「……あのなぁー」
「あははー、だいじょうぶそうだねぇー」
声の主はフルミナと同じ制服を着た少女だった。だが、彼女で目が行くのはそこではない。
彼女は車いすに乗っていた。そしてまぶたは優しく閉じられているが、まるで見えているかのように迷いなくフルミナたちのところへ

向かっている。

「さっきね、かいちょーさんから『今日はお疲れ様。僕は一足先に帰らせてもらうよ。アニメの時間が迫ってて厳しめだからね。みんなも消滅を確認したら帰っていいよ。話は明日の放課後にしよう』って言われたんだよー」

「かー、マジかよそれ。テキトーすぎじゃね？」

車いすの少女の後ろから、いつの間にか集まっていた赤髪の少年が頭をぼりぼりかきながら不満そうに言う。

「ま、それがあのダメ男だ」

赤髪の少年の言葉に、ため息半分に銀髪の青年が答える。

「……さて、消滅は確認したんだしよ、オイラ達も帰ろうぜ？」

そう言って、一足先に赤髪の少年が踵を返し、グラウンドの先にある正門へと歩き始める。

それを皮切りに、皆ぞろぞろと正門を目指す。

「私たちも帰ろう？」

ポニーテイルの少女がフルミナに言う。

「……ああ、そうだな」

フルミナはふと夜空を見ながらつぶやいた。

「……こんなことがしょっちゅう起きているのに、普通の奴は気が付かないんだよな」

いつからだろうか。

こんな普通の奴が気付かないことに、気付くようになったのは。

そんなに昔の話ではない。むしろつい最近の話だ。

フルミナはグラウンドの先にある建物――自分たちが通っている古宮高校を眺めた。

……まだ、ここに入学して一学期たってないんだよな。

「？　どうしたの？」
立ち止まって動こうとしないフルミナにポニーテイルの少女が不審げに声をかける。フルミナは小さく首を振って言う。
「いや、なんでもない。さあ、帰るか」
フルミナ……いや、宝条雷牙（ほうじょうらいが）がこの世界に入り込んだきっかけは、今からほんの一か月前のことだ――
？

序章（後書き）

誤字、脱字、修正が必要であろうところは、是非指摘してくださいな。

01（前書き）

ちょっと主人公、不遇が続きます

01

「…あ〜、ダリィ…」
夕方の土手を、一人の少年が両手をズボンのポケットに突っ込みながら歩く。
「今日も一日ロクなことがなかったな…」

五月某日、高校生活を送るようになってから一か月ほどたった平日。今日もまた学校をさぼって、一日無為に過ごした。あった出来事と言えば、つい先ほど同じような年頃の野郎とケンカしたくらいか。
「…ん？」
オレはふと正面を見て表情を曇らせた。目線の先には見知った高校の制服を着た男子生徒らがいた。楽しげに談笑している。

「……、もうそんな時間か」
ゲーセンで時間をつぶしていたら、どうやら下校時刻と重なったらしい。
オレは素知らぬ顔で男子生徒らの横を通り過ぎようとした。その際にちらと生徒らの顔を見て、オレは軽く舌打ちをした。

…よりにもよってクラスメイトかよ。
生徒らの顔をオレは知っていた。……もちろん、向こうも。
「…おい、さっきのって宝条、だよな」
「ああ、だよな…」
オレが離れた後、背後からそう声が聞こえた。オレはそのまま歩き続け、やつらが見えなくなったところで立ち止まった。おもむろに携帯を取り出し、時間を確認する。
「…はあ、ダリ…」

小さくため息をつき、オレは再び歩き出した。

†††††

オレの名前は宝条雷牙。…アホみたいな名前だが、本名。自分で言うのもなんだが、世間一般に言うところの『不良』だ。ロクに学校にも行かず、ゲーセンで時間をつぶすようなことばかりしているやつを不良というなら、まさしくオレはそれに当てはまる。

両親はだいぶ前に離婚。母方に引き取られたが、当の本人は子供――オレがいることを否定し、新たな男を捕まえてどこかへ消えてしまった。父も母もどちらも遊び人で、親戚筋はオレの両親を毛嫌いしているらしく、半ば絶縁関係でみな近くにはいない。オレ自身もこのように不良少年なので、喜び勇んでオレを引き取ろうとする者はいなかった。

つまり、オレは一人浮いている、あるいは『存在しない人物』として血縁関係筋には認識されているようなのである。まあ、別にオレはそれでもかまわない。両親が残した小さな貸家一（どうなっているのかよくわからないが、オレが居座り続けてもなんの警告もない）で普通に生活しているし、なにより…、もう慣れた。

一人で生きていかれる。

戸籍とかはあるのだろうが、『存在しない人物』として扱われ、無駄に生きている。

将来なんてどうでもいい。

だから、将来の道を作る土台になるだろう学校ですらも意味を感

じられない。

それがオレ、宝条雷牙だ。

まさしく『不良』人間といえるだろう。誰も近づきもしないろくでなしの人間。

だが、世の中『例外』というものもあるようだ。

「雷牙！」

住宅街を歩いていると、後ろからオレを呼ぶ声がした。

「あんた今日も学校さぼったでしょ！」

オレが振り返る前に、声の主はオレの肩をぐいとつかんだ。オレはため息をつきつつ、そいつを振り返った。

「悪いかよ」

「悪いに決まってるでしょ！」

振り返った先には、学校帰りだろう、制服姿にスクールバッグをもったオレと同じ年頃の女の子がいた。自慢の長いポニーテイルを不満げに揺らし、同じく不機嫌そうな表情でオレをにらんでいる。

コイツの名前は日向楓（ひなた）。子供のころからずっと隣に住んでいる、いわば幼馴染の女の子だ。昔から真面目な奴で、しかも長年一緒にいるせいか物怖じせず、ことあるごとにオレにこうして忠告をする。

「…放せよ」

オレは面倒臭そうに楓に言った。すると楓は力強く首を横に振った。長いポニーテイルが大きく揺れる。

「いいえ、放さないわよ。アンタがきちんと学校に行くって言ってくれるまではね！　……って」

きつい口調で責めたてていた楓が、オレの首筋を指さして言葉をのんだ。

「アンタここ、血が出ているじゃない」

「ん？　……あ」

示された個所に軽く触れると、ぬるっとした感触と軽い痛みが走った。おそらく先ほどケンカした際に作ったものだろう。

…心配そうにこちらを見上げる楓が目に留まり、オレは顔をそらした。

「…ほっとけ」

「放っておけるわけないでしょう！　なに、またケンカでもしたの？　…大丈夫？」

責めるような口調の中に、『心配』の感情が混じる。

「お前には、…関係ないだろ」

その感情がいやにうっとうしく感じて、オレは楓を突き放すように言い放った。しかし楓はオレから離れるどころか、さらに近づいてポケットからハンカチを取り出した。

「関係ないことないでしょう。何年一緒にいると思ってんのよ。ああもう、ちょっと動かないで。止血だけでも…」

「…ほっとけよ」

「だから動かないでって言ってるでしょ。放っておくとばい菌が――」

「ほっとけつってんだろ！！」

「！？」

楓はびくっと体を震わせうつむき、ゆっくりとオレから身を離した。

「…ちっ」
オレは何とも言えない心境を覚え、舌打ちを残してその場を去ろうと――
「…なんで、なの？」
ふと、足を止める。
「どうしてそんなに、変わっちゃったの…」
楓の小さな声が聞こえて、
「確かに、おじさんおばさんはひどい人だった。それが雷牙の負担になっているんだと思う。一人苦しんでいるのかなって、思う。…けど―」
そこで楓が顔を上げた。いつも強気な目が、オレをとらえる。
「あんたが変わる必要ないじゃない！！」
「…っ」
オレは言葉を失った。
だって…
「昔は、あんなに格好いい男の子だったのに」
楓の目に、涙が見えたから。
「…雷牙の、ばかっ」
涙をためた目でオレをにらみ、楓はオレの前から走り去った。
「……っ」
ダンッ
楓が見えなくなって、オレは思い切りすぐ横のブロック塀を殴りつけた。
「…最悪だ」

そのまま、ずるずるとブロック塀に身を預け、オレは地面に腰を下ろした。
「…いってえ」
殴りつけた拳がジンジンと痛む。見ると少し血がにじんでいた。ついでに思い出したかのように首筋の傷も痛みだし、もう一度オレはつぶやいた。
「……いってえ」

†††††

翌朝、いつも起こしに来ていた楓は結局来なかった。オレはあまり寝付けず重い頭をかきながら、ゆっくりと体を起こした。
「…くそ」
鈍く走る頭痛に顔をしかめ、オレは洗面台に向かう。蛇口から出た冷たい水を乱暴に顔にかける。しかし、頭痛は治らなかった。
「…なんだよ、ちくしょう」
顔を洗って少しだけ目が覚めたせいか、昨日のことが鮮明に思い出されてしまった。

『…雷牙の、ばかっ』

目に涙を浮かべてにらむ楓の顔を。
「……」
オレは少しの間ぼうっと蛇口から出る水流を眺めていたが、小さくため息をつき蛇口を閉め、服を着がえに自室に戻った。

†††††

ピンポーン

インターホンが鳴ったのは、オレが外出しようとしていた矢先だった。

「…！？」

訪問者の顔を見ずに玄関ドアを開けて、オレは驚いた。

02

「ちょっといいかしら、雷牙君？」
玄関先にいたのは、楓の母親だった。
「仕事先にちょっと無理言って、少しだけ時間をもらったの」
「時間がないから入ることまではしないわ」と言って、楓の母親は玄関以降入ろうとはしない。だが、突然の来訪にオレは驚き、気を遣うことができなかった。

「……おばさん、何の用ですか」
「うん。楓のことでちょっと、ね」
それを聞き、オレは少し顔をしかめる。昨日の今日だ。楓のことと昨日のあれしかない。

「……あの子ね。昨日私が帰るまで、……ううん、帰ってからも、ずっと泣いていたのよ。電気もついていない、暗い自室で」
「……」
オレは何も言わず、楓の母親が続ける話を聞いた。

「今までにないことだったから心配になってね。知っているでしょう雷牙君も。楓はどんなに悲しいこと、苦しいことがあっても、簡単には他人に見せない子だってこと。最初は学校がつらくなったのかなって思ったの。あの子、生徒会に入ったって言っていたから、それが原因かなって。……でも、すぐには言ってくれなかった。ようやく話してくれたと思ったころには、もう日が変わりそうだったわ」
やれやれといった感じに、楓の母親は首を振った。
「あの子があそこまで悲しみに浸っていた原因。ぽつぽつと語ってくれたの」

楓の母親はゆっくりとオレの目を見てきた。
「『雷牙が変わっちゃった』てね」
だから、その時のオレの動揺は気づかれたのかもしれない。
「雷牙君。最近学校に行かなくなったみたいね。…どうして学校、行かないの？」
「……」
オレは楓の母親の目から黙って目をそらした。それを見て、楓の母親は小さくため息をついた。
「うん。雷牙君も大変なのもわかる。自分ひとりで生きていこうとする苦しみに耐えるのに精いっぱいなのかもしれない。……でも、それは違うのよ」
楓の母親が、首を横に振る。
「あなたは一人じゃない。楓がいるし、私も……いや、私たち家族が……、
あなたを実の家族のように思っているわ」
「……！」
楓の母親の言葉に、オレははっと目を見開いた。
「だからね、一人で抱え込まないで。あなたも私たちの家族。悩んでいることがあったら、何でも話してちょうだい。家族なのだから、ね？」
優しい口調で楓の母親は言う。オレはその言葉にいたたまれなくなって、さらに顔をそむけた。楓の母親は顔をそむけるオレを見た後、自身の腕時計を確認した。
「……そろそろ私も仕事に行くわね。……雷牙君、今日は私のほう

で楓を慰めるわ。でも、夜になっても、明日になってもいいから、雷牙君自身が楓に謝ってあげてね」
「それじゃ」と言い残し、楓の母親は玄関から出て行った。オレはその足音が消えるまで、しばらく動かずに立っていた。

「……家族、か」
オレはぼそりとつぶやいて、片手で頭に触れる。
まだ頭痛は引いていない。

†††††

結局その後外出したのは、夕方になってからだった。昼食も食べる気になれず、ベッドで浅い眠りを繰り返していた。外出しようと思い立ったのは、さすがに腹が減ったからだというのもあるが、それだけではない。
オレはしきりに時計を確認する。もう下校時間だ。

そう、オレは楓を待っていた。

高校に行く気などなかったが、楓たちの家族に強く推され、半ば無理矢理に通わされた高校。何度か楓に引っ張られ歩かされたその通学路に、オレはいた。
時刻は五時半ごろ。ちらほらと見知った制服が横を通り過ぎる中、目当ての姿は見えない。

「生徒会に入ったって言っていたな」
十分ほど待っても来ない楓を待ちながら、ふと考える。
「もしかしたら、遅くなるのかもな……」
さすがにこれ以上何もせずただ突っ立って待つのは嫌だと思ったオレは、近くのファストフード店に目を向けた。あそこなら、外の様

子を見ながら座ることができる。道のわきでずっと立っておくよりは何倍もいい。そう思ったオレは、一度楓が来ていないかを確認すると、店へ足を運んだ。

「ちょっと待ちな」
ちょうど店内に差し掛かろうとしたところで後ろから声が聞こえ、肩をつかまれる感覚。
「ああ？」
聞いたことのない声で、しかも明らかに穏やかではない言動。オレは少し身を固めながら振り返った。

「少し面を貸してもらおうか」
見るとオレより2，3ほど年上そうな男がいた。俳優になっても通用しそうな出で立ちをしたその男が、オレの肩をつかんでいた。そしてその男の後ろにもう一人。

「よう、昨日ぶりだな」
見覚えのあるツンツン頭の男が、見下ろすような口調でそう言った。昨日、オレの首筋に傷をつけたやつだった。
オレはツンツン頭から視線を、肩をつかんでいる男に移す。
「嫌だね。離せよ」

オレは肩の手を振り払おうとした。しかし思いのほか、男の力は強かった。振り払えない。
「……ちっ」
オレは舌打ちをして、再度振り払おうと男の腕に手をかけたところで――。

「ぐはぁっ」
ツンツン頭の男の蹴りが勢いよく腹に突き刺さった。それだけで体

がぐらつく。
「馬鹿野郎、人目があるだろうが。少し我慢しろよ」
オレから手を離した俳優男がツンツン頭の男をいさめる。そして俳優男は言いながらオレの髪を無造作に握った。

「ってえな、離せよ！」
オレは俳優男に怒鳴ったが、男はそのまま歩き出した。なす術なくオレは男に連れて行かれ、すぐ近くのビルとビルとの狭く暗い空間に突き飛ばされた。
「何すんだよ！」
しりもちをついたオレは、座ったまま男たちをにらんだ。表通りに出る道を阻むように並んで立っている二人は、怒鳴るオレを見下ろす。

「へへ、昨日は世話になったな」
ツンツン頭の男が汚い笑みを浮かべ、一歩前に出てきた。対して俳優男は腕を組み、傍観する姿勢を取っていた。
「昨日は油断して後れを取っちまったが、今日はそんなことはしねえよ」

「テメェら、……なめてんじゃねえぞ」
オレはゆっくりと立ち上がって、拳を握りしめる。
…俳優男は少し遠い。しかも力量がわからない。たいしてあのツンツン頭の男は比較的近いし、なにより昨日ケンカしたがたいしたことなかった。…だったら先にこのツンツン頭を――

ドコッ！！

音がしたのはオレの背後からだった。音とともに頭部に鈍い痛みが走り、一瞬で意識が遠のきそうになった。

「なっ、……な」
「おいおい、頭はやめとけよ。死んだらヤベェだろうが」
「おお、そうだな」

声は後ろから聞こえてきた。痛む頭を片手で支えながら振り返ると、さっきとは別の二人の男がいた。一人は片手に鉄パイプを持っている。おそらくそれで頭を打たれたのだろう。血が流れてくるのを感じながら、オレは後の二人をにらみつけた。
「てめえに恨みは別にねえよ俺は。けどまぁ、仲間がやられたなんて言われりゃ、黙ってはいられないんでねぇ」
鉄パイプを持った男がにやにやと笑いながら言う。

……つまりこいつらは、ツンツン頭の男の報復に手を貸しているということか。……倍返しにもほどがあるぜ。
「お、まえらぁ……っ」
「おー、しぶといねえ」
頭を打たれてもまだ意識のあるオレに向かって鉄パイプを持った男がそういうと、俳優男以外が下品に笑った。

しかし、その笑い声もほどなく終わった。
「んじゃ、そろそろ。……死ねやコラァ！！」
次に飛んできたのはツンツン頭の男の右のボディブローだった。
「がはっ！」
あっけなくオレは地面に膝をついた。そこから前のめりに倒れようと――
「オラァ、まだまだ終わらねえぞ！」
そこに誰ともわからない蹴りが飛んできた。オレは声も上げることができず、地面に転がった。
……そこからは一方的な展開だった。蹴られ殴られ、最終的には何

をさせているかもわからないくらい意識がはっきりしなくなった。
やがて痛みも感じなくなり、男たちの声も聞こえなくなった。それは男たちの気が済んだからなのか、単にオレが聞こえないくらいダメになったのか。それも分からない。
もしかしたら、オレは死ぬのかもしれない。そう思った。

でも、それでもいいとも思った。

こんな死に方をするのはかなり不本意だが、別に生きていても何もすることはない。

もともと『存在しない人物』だったのだ。たとえここで死んでもあるべき姿に戻るだけではないか。死んでも誰も悲しまない……。

いや、本当にそうなのか？

本当に誰も悲しまないのか。
声をかけてくれた人がいたのではないか。
オレのことを家族だと言ってくれた人がいたのではないか。
ずっとオレに接してくれて、オレのために泣いてくれるやつがいるのではないか。

オレは今、何をしている。

今日はやることがあって、ここまで出できたはずだろ。

そうだ、ここで寝ている時間はない。

オレはあいつに、楓に謝りに来たんだ！

03

「……っ」

最初に気付いたのは、俳優男だった。

「おお、こいつ動こうとしてるぞ」

雷牙の手が動くのを見たツンツン頭が、笑いながら言う。それをきいて、その場にいた男たちがぞろぞろと雷牙に近づいた。

「……っ馬鹿、離れろ！」

俳優男がとっさに怒鳴る。しかし、遅かった。

「へ、あっ―」

次の瞬間には、雷牙の周りにいた男たちは、弾かれたようにビルにたたきつけられていた。

「っが！…な、なにがあったんだ！？」

飛ばされた男たちは、困惑した様子であたりを見回した。唯一離れていて飛ばされなかった俳優男は、驚きの表情を浮かべていた。

「……こいつ。……まさか」

「ひぃっ」

そのときツンツン頭が悲鳴を上げた。

血を流しながらゆっくりと立ち上がった雷牙から、薄く白いオーラが出ているのを見てしまったのだ。

雷牙は一歩ツンツン頭のほうに近づいた。血を流し、うつむいていて表情が見えない雷牙の様子は、白いオーラと相まってツンツン頭にとっては逆に恐怖を増幅させることになったようだ。

「ひぃぃー！　ば、化け物！？」
ツンツン頭の男は、一人一目散に表通りに走って行った。それに我先にと口々に悲鳴を上げながら残り二人の男たちが続く。暗い空間に残ったのは、俳優男と、白いオーラをまとった雷牙だけになった。

「……」
雷牙が俳優男のほうを向く。俳優男は小さく舌打ちをして一歩前に出て拳を固める。

「……久しぶりだな。魔法使いとの戦闘は」
俳優男が小さくつぶやく。

「見たところかなりの魔力だが、ムラが多いな。まだまだ素人か。……だが、悪いな」
と、俳優男が自信ありげにつぶやくと、みるみるうちに俳優男の髪と目が銀色に変化し始めた。
「なにぶんこっちも久しぶりなんでね、手加減ができないのさ」
それと同時に、俳優男の拳が白いオーラをまとい始めた。

「殺さないようにはするが、もし最悪な事態になったら……恨んでくれるなよ」
俳優男が腰を下げ、右拳をためる。

「……いくぞ！」
俳優男が雷牙に向かって一歩踏み出した瞬間、

キュインッ！！

「っ！？」

俳優男の足元で何かがはじけた。俳優男は強引に踏み出そうとしていた足の軌道を変える。悪くなった体のバランスをすぐに修正しながら、俳優男は足元を見た。

「…これは」

先ほど足を踏み出そうとしていたアスファルトが、小さくえぐれていた。

そして、謎の光の残滓が漂っていた。

「攻撃魔法か。……いったい誰が―」

「あんた、雷牙になにしてるのよ！」

そのとき、表通りのほうから少女の声が響いた。俳優男は突然の聞き覚えのない声に驚き、思わず顔を上げ声のしたほうを眺めた。

「今警察も呼んだ。もう逃げ場はないわ」

俳優男の視線の先にいたのは、楓だった。

学校帰りであろう楓は制服姿で、かばんを足元に置き、両手には代わりに謎の長い杖のようなものを持っていた。

そして驚くことに、本来の黒髪と違い、彼女の髪の色は淡い亜麻色に輝いていた。

「…！？」

もちろん俳優男は楓のことは知らない。

しかし俳優男は、楓の姿を見るなり驚きの表情を見せた。

「…」

「…」

俳優男と楓は目を合わせたまま動かない。にらみ合い、言葉を発さ

ない。

「……あんたは」

と、ふいに俳優男が二人の間の沈黙を破った。

「あんたは、古宮の生徒だな。…しかもその腕章、生徒会か」

「……そうよ。そういうあなたは一体誰？　あなたも魔法が使えるようだけど」

突然の俳優男の質問に、まじめに答えるか悩んだ楓だったが、隠しても無駄だと思い素直に言った。だが、警戒は解かない。俳優男の背後で今にも倒れそうになっているが、謎の白いオーラを放っている雷牙をしきりに見ながら、俳優男をにらみつづけた。

「確かに、俺も魔法が使える。まあ、お前とは系統が違うがな。それより、こいつもお前らのトコの生徒会役員か？」

俳優男は後ろの雷牙を軽く一瞥しながら言った。それに楓は首を横に振る。

「いえ、雷牙は生徒会役員ではないわ。……あんたは、私たちの生徒会を知ってるの？」

逆に尋ねる。すると俳優男はすこし口元に笑みを浮かべて、

「まあ、多少な。……黒塚のやつは元気にしてるか？」

「……あんた、会長の知り合いなの？」

楓が眉をひそめる。

「会長……、あいつが、ね。……当然と言えば当然か」

懐かしそうに口元に笑みを浮かべる俳優男の様子に、楓は苛立たしげに、

「何一人で納得してるのかしら？　……いや、いいわ」

そういって楓は小さくうつむく。
「それよりも今は……」と楓は顔を上げ、一度雷牙を眺めて、
「今はあんたが許せない！」
言い放ち、勢いよく長杖を横に振った。すると長杖の先から小さな光の球が生まれ、そのまま俳優男のほうに弾丸のように飛んで行った。俳優男はサイドステップでそれをかわす。
「あんたが悪いんじゃない！」
怒鳴りながら楓は何度も光弾を俳優男に放つ。しかし俳優男は冷静にすべてをかわして見せる。
「雷牙は何も悪いことをしてない。全部あんたが悪いのに、どうして雷牙が痛めつけられないといけないの！？」
楓の怒りの言葉に、俳優男は眉をひそめた。
「……どういうことだ？」
思ったことをそのまま口に出す。
「……どういうこと、ですって？」
すると俳優男の言葉に、楓は光弾を放つのをやめ、ぐぐっと長杖を強く握りしめた。怒りのあまり、押し殺したような口調になる。
「……よく言うわね。もう善悪の区別もないわけ？　自分がやったことを棚に上げて、気に入らない指摘をされたからやり返して。あんた最低だわ」
「だから何のことだ」
「とぼける気？　……もしかしてわからないの？　じゃあいいわ教えてあげる」
楓が、持っていた長杖の頭を俳優男の顔に向ける。

「あんたがやったのはカツアゲって言って、それはれっきとした犯罪なのよ！」

「……なに？」

俳優男は楓の言葉を聞き、声のトーンを落としてつぶやいた。そのとき後ろから何か音がした。白いオーラが消え、支えを失った人形のように雷牙が倒れた音であった。

「っ、雷牙！？」

それを見た楓は、俳優男の存在を無視してまっすぐに雷牙のほうへ駆け寄った。俳優男は横を通り過ぎる楓には目もくれず、何か考え込むように楓たちに背を向けてうつむく。雷牙のそばに駆け寄った楓はすぐさま雷牙を抱きかかえ、血が流れる頭へと軽く手を添える。すると楓の掌が淡く光を放ち始めた。それと同時に、流れ出る血の量がわずかに減っていった。

「……本当か、その話」

俳優男が確認しようとする言葉に、楓は顔を向けて言った。

「当たり前でしょう！　あんた、常識くらい学びなさ――」

「そっちの話じゃない！」

楓が言い終わらないうちに少し声を強め俳優男が言った。楓は気圧され言葉をのんだ。

「……カツアゲをした、というのは本当なのか」

その様子が背中越しに分かったのか、俳優男は一度落ち着くために軽く目を閉じた。口調は声を強める前に戻っていた。

楓はその質問に眉をひそめた。……なんとなくだが、俳優男が嘘を

ついているようには見えなかったからだ。

そういえばと、楓は少し思い出す。この狭い空間に躍り出る前に、数人の男たちが慌てて逃げ出すのを見た気がする。そのとき不審には思ったが、直後に雷牙の痛々しい姿が狭い空間の奥にあるのが目に留まり、怒りにその疑惑は吹き飛んでしまった。もしかしたらこの男と、その逃げ出していった奴らは仲間だったのではないだろうか。

さらに楓ははっとなった。今日学校でカツアゲの被害にあった生徒から犯人の特徴を聞いていたことを思い出したからだ。

……この人、聞いていた特徴と違う…。

「……ええ、本当よ。アンタの仲間か知らないけど、カツアゲをしたってのはホント。なんなら、被害受けた子を連れてきてもいいわよ」

楓は強く拒絶する姿勢を少し緩め、しかしすべては信用していないと言うかのように硬い口調で答えた。

「……そいつの特徴は、わかるか？」

俳優男はつぶやくように聞く。もしかしたらある程度予想をしているようだ。

「……金髪をむやみに立てた細身の男だって聞いたわ」

「……そうか」

俳優男の予想は当たっていたのか、強く握りしめられている拳からは押し殺した怒りが見て取れた。

その時少しの間静かであった空間に、遠くからパトカーのサイレンの音が響いてきた。

「……いまさら言っても遅いのだろうが…」

徐々に大きくなるサイレンを聞きながら、俳優男は楓に聞こえるように言った。

「……すまなかった」

そう言い残し、俳優男はその場で大きく跳躍した。

「あ、こら待ちなさい！」

楓は倒れた雷牙を抱きかかえつつ、俳優男に向かって言い放った。

だが俳優男はビルの間を三角飛びの要領で登って行き、楓が言い終わる前にはビルの陰に隠れてしまった。

パトカーと救急車が到着したのは、それから間もなくであった。

０３（後書き）

ようやっと魔法登場という感じです。
俳優男さん、早く名前を呼ばせてあげたいですね。
ま、彼にはもう少し待っていただきましょう。

す、すみませんが、十歳程度の女の子はもう少し待ってくださいな。

04

「……」
オレはゆっくりとまぶたを開けた。あたりは暗闇に包まれていてあまり視界は良くなかったが、窓から差し込む薄い光が、多少オレに周りの景色を見させてくれた。……まったく見覚えのない景色だったが。

「……ここは？」
オレは体を起こしてもっとあたりを確認しようとしたが、予想外に体が重く全く動かない。

「……いつっ」
不意に頭のあたりにピキッと痛みが走った。そのせいか、寝起きでおぼろげな意識が少し覚醒した。先ほどよりも情報が頭に入ってくる。暗闇だからよくわからないが、おそらく白一色であろう壁。飾り気
のない空間。かすかにおう消毒の香り――。

「……病院、か」
オレは力んでいた体の力を抜き、ベッドに体を預けた。よく見ると外は夜なのか、淡い月の光が病室に差し込んでいる。おぼろげに見える天井を仰ぎ見ながら、オレは気を失う前の記憶をたどる。

「……頭を打たれたせいかよく覚えてないな」
オレが思い出せたのは、不良たちに一斉にフクロにされたところまでだった。それ以上先――誰が駆けつけて、誰が病院に連れてきたのかは分からない。

「……ん？」
そういえばと、オレはふと気になることを思い出した。
「……なんか、楓の声がしたような…？」
かすみがかってはっきりとしない記憶の中、気のせいかもしれないが、オレは楓の声を聴いたような気がした。

……もしかして、あの場に楓がいたのか？
「……」
オレは小さくため息をついた。もし、いたのだとしたら、また心配をかけてしまったことになる。謝る理由が増えるわけだ。

「……ん？」
と、オレは何か物音がするのに気が付いた。空気の流れる音というか、むしろこれは呼吸の音――
「……まさか」
つぶやき、かろうじて動く頭を動かして、自分の寝ているベッドのわきを見る。そこには……。

「……まったく、お前は」
オレは再びため息をついた。目線の先には、幼少のころからずっと見てきたよく知った女の子、楓がいた。ベッドのわきにある小さな丸い椅子に座り、ベッドに伏せるようにしている。……おそらくずっとそこにいたのであろう、眠っている彼女は制服姿であった。

「……ごめんな、楓」
ぼそっと、オレはつぶやく。
「お前はいつもオレを心配してくれてるけど、……オレにはそんな価値なんて――」

「……ん、…らい、が？」

と、楓は身じろぎしたと思ったら、うっすらと目を開けた。オレは聞かれたかと思い一瞬びくっとしたが、表には出さないように努力した。

「……よ、よう」

「……っ、目が覚めたのね！　大丈夫、雷牙？」

しばらくは眠たげに眼をこすっていた楓だったが、オレの顔を見るや急に顔色を変えた。最初はうれしそうに、そしてすぐに心配そうな顔になる。

「……別に、なんともない、……でもないか。体がさっぱり動かない。あと、なんか体がすごくだるいわ」

どうせ楓は大丈夫と言っても嘘だと気づくだろう。そう思い、オレは正直に言うことにした。変にはぐらかすと、逆効果なのは長い付き合いで分かっている。……分かってた、はずなんだがな。

「それはそうでしょう、いきなりあんなに魔力を解放するから……」

「……は？　なんていった？」

「えっ、ああ、いえこっちの話！」

少しぼうっとしていたのと、楓自身の声が小さかったのもあって、オレは楓の言葉がよく聞き取れなかった。なんか、魔法とか聞こえたような気がしたが。聞き返すと、楓は慌てて首を振った。……？

「……お医者さんの話では、二週間は絶対安静だって」

「……だろうなぁ」

オレは自分の体の感覚を調べるように目をつぶった。全身に力が入らない。それに加え、気にすると急に全身が鈍く痛み出した。動けないから見ることはできないが、さぞ色々な個所が青くなっている

ことだろう。

オレは目を開け、うつむき何も言わずオレのベッドを見つめている楓の横顔を盗み見た。そこには、何かを期待するような高揚感と、何かにおびえるような不安感の入り混じった、読みにくい表情が張り付いていた。オレはその横顔を不審げに眺めたが、すぐに目をそらし暗い天井を眺め始めた。

そのまま何も会話がない時間が過ぎて行った。……だが、

「……あ」

「え？」

「……いや」

最初に沈黙を破ったのはオレだった。でも、ためらってしまい一度口をつぐんだ。このままうやむやにしようかとも思ったが、どうしても楓に聞いておきたいことがあった。

オレは一度楓の顔を見た。楓はオレの言葉を待っているようだ。ばっちり目があった。オレはふいとそっぽを向いて、

「……何も、聞かないのかよ」

「え？　聞くって？」

聞き返してきた楓に、オレは苛立たしげにため息をついた。もし体が動いて入れば、頭をかきむしっていたことだろう。

「だから……。…オレが何をやってたのか、聞かないのかよ」

「……」

……すぐに返事は返ってこなかった。だが、それがオレには少しありがたかった。言った後に後悔したが、実際に聞かれたらどう言うつもりだ。

といっても別に悩むほどでもないかもしれない。……だってオレはただケンカを――

「……人助け、してたんだよね」

……楓のその言葉に、思わずオレは小さく息をのんだ。そしてよくわからない素振りを出来るだけ作りつつ――出来たかどうかは保証できないが――オレは反応した。

「お前、何言って……」

だが、楓のほうは確固たる情報源を持っていたようだ。

「その場に偶然鉢合わせた友人から聞いたの。昨日不良に絡まれてた人が、雷牙に助けられてたって」

「……」

オレは黙る。野次馬がいたことは知っていたが、まさかその中に楓の友人がいたとは……。

「……だから、さ。雷牙は別に悪いことをしようとしてケンカしたわけじゃ、ないんだよね？」

優しい声で楓が言う。オレは少し間をおいて、

「……結局ケンカしたのには変わりないだろ」

少々ひねくれた返事を返す。なぜ素直に認められないのか。……そりゃ、オレにも分からない。

すると楓はうつむいて、

「……うん、そうだよね。ケンカはよくないよね」

ちいさく、悲しむ声がもれる。だが、次の瞬間にはその声は一変し

た。

「……でもさ。それでも人助けよ。確かにケンカはよくないけどさ、そうでもしないと助けられなかったんでしょ？」

「……。なんでオレが助けようとしたって思うんだよ。ただ単にケンカがしたかっただけで、そこにたまたまあいつがいただけかもしれないだろ」

優しく問いかける楓に、オレはあくまでぶっきらぼうに答えた。

すると、ゆるぎない確信を持った様子で楓は言った。

「そんなの決まってるじゃない。……雷牙は優しいからだよ」

「はぁ？」

オレは思わず楓を振り返る。

「な、何言ってんだよお前。オレが優しいとか、何を根拠にそんな…」

「だって、雷牙はその人のこと放っておけなかったんでしょ？　わざわざけがまで負って、その人を何の見返りも求めずに帰したんでしょ？　……雷牙は昔からそうだった。いっつも誰かをかばってけがをするよね」

「……あのね、雷牙」と楓はオレから目を離して虚空を見上げた。

「実は私、その話を聞いてすごくうれしかったの。やっぱり雷牙は雷牙なんだ、ってね。変わったと思ったけど、全然変わってない。それがうれしくて……」

とそこで小さな嗚咽が楓の口から洩れた。オレは慌てる。

「お、おい……」

「……ごめん」

楓はそういって流れていた涙をぬぐった。そして明るい声とともに立ち上がった。

「……さて、もう遅くなるから私帰るね。大けが負ってるんだから、雷牙も無理して起きてちゃだめよ？」

そういって足元にあったバッグを持ち上げ、おやすみと言って踵を返す。

「……楓」

オレが呼び止めると、楓はスライドドアに手をかけたまま振り返った。

「なに？」

「あー、……えっと」

オレはすぐに言葉が出ずに、目を泳がせた。そして一度小さく深呼吸して、

「……その、悪かったな。昨日怒鳴ったりして」

すると楓は最初驚いた顔をして、

「……早く傷を治して学校に行ってくれたら、許してあげる」

次の瞬間には満面の笑みを浮かべた。その頬が少し赤くなっていたように見えたのは、オレの気のせいか。

「はぁ？　お、おいちょっと待て。それとこれとは話が――」

「じゃあね、雷牙。おやすみなさい」

「あ、おい！」

そう言い残して、楓は病室を去った。一人オレが取り残される。

「……はぁ」

オレはため息をつきつつ、力なく頭をまくらにうずめた。

そしてぽつりと、

「……学校、か」

†††††

病院に搬送された翌日の朝、医者には二週間ほど様子を見ましょうと言われた。楓から聞いていたので、改めて聞いた形だった。

だが、入院して四日。いつものように診に来た医者に、あと数日で退院出来るでしょうと言われた。おいなんだそれは、とオレは思ったが、それは医者のほうも同じだったらしい。予想外にオレの回復が早かったとのこと。

奇妙なことはもう二つある。

一つは、楓の見舞いに気が付けなかったことだ。

というのも、楓は律儀に夕方には必ず見舞いに来ているのだが、どうも楓がくると眠くなるのだ。さっきまで寝ていて、眠気がないときにも関わらず、だ。

しかも楓は決まって窓際に一回立つ。窓の外を覗き込むようにするのだが、いつも何をやっているのか見当もつかない。なにかをつぶやいているようにも見えるのだが、定かではない。

そういえば窓際に立たれた後に、決まって眠くなっていたような気がする。とりあえずぼっちり寝顔を見られているのは、恥ずかしい限りだ。

もう一方のほうは奇妙というか、むしろ驚いたという方が正しい。

……オレの病室を、あの俳優男が訪ねてきたのだ。

０４（後書き）

楓さんオンステージ……

05

……俳優男がオレの元を訪ねてきたのは、入院してから三日後のことだった。

「なっ……」

軽いノックの後に入ってきたそいつに、オレは目を疑った。

「……お前っ」

オレはベッドから跳ね起きようとした。だが、直後に走った痛みに軽い眩暈を覚えた。残念ながらベッドから体を起こすのが精いっぱいであった。

「……。何しにきやがった、てめぇ」

片手で頭を支えつつ、オレは俳優男をにらみつけた。

「……」

俳優男は感情の読めない目で、じっとオレを見つめる。

が、その直後オレはさっきとは違う理由で目を疑うことになる。

「……すまなかった」

なんと俳優男が頭を下げたのだ。

「なっ。……は、え？」

突然のことに、オレはただただ驚くばかりだった。

「い、一体どういうことだ？」

オレはとりあえず思いついた言葉をそのまま投げかける。すると俳優男は頭を上げ、

「お前にそのけがを負わせたことに対する謝罪だ」

「はぁ？」
ますます意味が分からない―いや、意味は分かるが理由が分からない。
「……なにかたくらんでいるのか？」
すぐには信用できず、オレは再びにらみつける。すると俳優男は軽く手を横に広げおどけて見せる。

「別に何もたくらんではいないさ。ただ単に落ち度がこちらにあると思っての謝罪だ」
「落ち度……？」
「そうだ」
俳優男は軽くうなずき、口を開いた。

「前にお前を連れ込んだのは、……ツンツン頭がお前にやられたと言っていたからだ。……が、実はそれだけじゃなかったようでな。聞くところによると、あのツンツン頭がカツアゲしてたところにお前が出くわしたそうじゃないか。しかも手を最初にあげたのはあいつの方らしいな。お前はただ不運な友人をかばっただけ。それだけ聞けばどちらに落ち度があるか、なんて明らかだろう？　それを知らずに俺はお前を殴り飛ばすのに手を貸してしまった。……いまさら謝っても遅いだろうがな、……すまないとは思ってる。今なら二，三発食らっても文句は言わねぇよ」
そういって自分の頬を指でぽんぽんとたたいた。殴りたければ殴れ、と言っているのだろう。

それにオレは……。

「……ふーん、そうかよ。ま、友人じゃなかったんだけどな」

そういって再びベッドに横になった。俳優男は予想外とばかりに目を丸めた。
「……殴らないのか？」
「殴るわけないだろ」
聞いてくる俳優男にオレは面倒臭そうに答えた。

「わざわざ謝りに来たやつを、どうして殴らなきゃならないんだよ。逆にこっちが悪者になるだろうが。……オレもかっとなって殴り返したのも事実だし、もっと穏便に片づける方法もあったかもしれないのに、ケンカに持ち込んだのはオレのほうも一緒だ。無理に殴る権利はオレにはないよ」
……お前らが起こしてくれたきっかけのおかげで、少し歩き出す気持ちになれたのだ。こうなったことは正直憎らしいが、けがの功名でもある。そこには、……少し感謝してるかもしれんしな。
……そんなことを心の端で思いつつも口には出さず、もう言うことはないとばかりに、オレは寝返りを打って俳優男に背を向けた。
と――、

「っはははは！」
突然俳優男が笑い出した。何事！　とオレが振り返ると、俳優男は面白そうにオレを見ていた。
「ははは。っお前、面白いやつだな！」
「な、なんだよ面白いって！？」
「言葉通りの意味だよ」
「はぁ？」
俳優男がくくっと笑う中、オレはただ首をかしげるばかりであった。
「……お前、名前は？」

ひとしきり笑った後、オレに向かってそう言った。
「ん、オレの名前？」
オレは脈絡のない問いに不審げに聞き返した。俳優男は気を悪くした風はなく、むしろ小馬鹿にするような様子で、
「そうだよ。まさか、自分の名前も分からないほど頭がダメになったわけじゃないだろ？」
「んなわけねえよ！　……オレの名前は宝条雷牙だ」
「雷牙……。またアレな名前だな」
「うっせ」
「ははは、三割ほど冗談だ」
「それはマジと言っても差しつかえないだろ！」
ははは、と俳優男は再度笑った。
「……俺の名前は氷室勠也（ひむろりくや）だ」
そしておもむろに自分も名乗る。そして小さく肩をすくめて、
「……まあ、これで俺の要件は済んだわけだ。そろそろおいとまさせてもらうぜ。……じゃあな、雷牙。早く治って彼女を安心させてやれよ」
「はぃ！？　か、彼女ってなん――」
「……またな」
「あ、おいちょっと待っ――」
オレが止めるのも聞かず、俳優男―勠也はあっさりと病室を後にした。
「……なんなんだ、あいつ？」
若干呆れ気味にオレはつぶやく。昨日まで目の敵だったのにここにきてこれだ。そりゃ複雑な気分にもなる。

「……ん？」
ふとオレは勠也の言葉を思い出し、首をかしげる。
「……またな、て言ったかあいつ？」
またな……。……次にどこかで会うときのセリフだ。
……まあ、確かにいつか会うときもあるだろう。
しかしそれでもわざわざ『またな』なんて表現をするか？　これじゃまるで近いうちに必ず会うみたいじゃないか。
「……なんなんだよホントに」
オレはただ、答えの出ない問いに早々に白旗を上げ、ため息をついた。

とりあえず、これらが入院中オレの気になったことだ。あとは至って暇な入院生活であった。

そうして搬送からちょうど一週間で、オレは晴れて退院の日を迎えた。一週間たっても変わってない—むしろ誰かさん（大方お隣のお節介さんだろうが。いや、それ以外は考えたくないな……）が掃除してきれいになっていた我が家を見て、オレはむずかゆい思いをしながら、「ただいま」と小さくつぶやいた。

家に入ってすぐに自室に向かう。そして自室のクローゼットをおもむろに開けた。
目当ての服を探す。
そして見つけた時に、久しく着ていないその服が全然傷んでいないことに軽く皮肉気に口元をゆがませた。小さな高揚感とともに少し大きな不安感がつのる。

明日は、これを着てみるか。

その視線の先には、古宮高校の男子制服が掛けてあった。

０５（後書き）

次回はついに学校に行けそうです。

06

……世の中には、いい予感と悪い予感がある。『なんか今日調子いいかも』とか『この試合、勝てるかもしれない』とか、そういうのをいい予感とするなら、その逆―まったく自分に利益のない負の要素を含むのが悪い予感だ。
そう、例えば――

†††††

「……」

オレはちらりとあたりを見回した。すると何人かの生徒と目が合うが、どれも長くはもたない。目があったと思ったら、向こうがささっと目をそらすのだ。

「……はぁ」
オレは小さくないため息をついた。オレが今いるのは、古宮高校一年二組の教室。念のため頭に包帯をしたまま退院した翌日―つまり今日、オレは意を決して一か月ほど離れていた学校に足を向けたのだった。楓は子供のように喜んだが、その様子に小さく笑みを浮かべつつオレはある予感を感じていた。

……絶対に歓迎はされないよな……。

言うまでもなく悪い予感であるそれは、オレの中では予感と言いつつ確信に近かったのかもしれない。
悪い予感も確信も（確信のほうは当たり前だが）よく当たるものだ。
現に……

「……明らかに敵意の的だよな」

オレはほおづえをつきつつ、今度は窓の外を眺め始めた。視覚を使わなくなった分、クラスメイト達の声が少しだけ聞こえるようになった。

なんで――、いまさら……、てかあの包帯なに――……。

決して良好とは言えないつぶやきが耳に入る。まだ朝のホームルームも始まってはいないが、早くも来たことに後悔し始める。楓はなにか生徒会に用があるとかで教室にはいないが、このまま黙って帰ってしまおうかと思いだした。

そして本気に机の横にかけた自分のバッグに手をかけたその時――、

「君が宝条雷牙君だよね」

バッグを取るために頭を下げていたその頭上から名前を呼ばれた。一応呼ばれたので無視することもできず、オレは顔を上げ声の主を見た。

見覚えのない、細身の男子生徒であった。その後ろには、生徒会室に行ったはずの楓が立っていた。

「……なんだよ？」

オレは警戒しながら細身の男子をにらんだ。よく見たら三年生ということを示すネクタイをしている。

「いや、ちょっと日向君の話を聞いてね。突然で悪いんだけど、今日の昼休憩、生徒会室にきてくれないかい？」

しかし細身の男子は特に気にした風もなくそう言った。

「はあ？　なんで」
あまり機嫌がよくなかったオレは、とげとげしく聞き返す。
「なんでも、だよ」
「あ、でもそうだなー」と少し思案気に目を泳がせた後、オレの耳元でささやいた。
「しいて言うなら、日向君のためだよ」
「なに？」
オレは予想外の応えに、細身の男子を凝視した。その様子に満足したのか、細身の男子はくるっと背を向けて教室から立ち去ろうとする。
「それじゃ、待ってるよ」
「おい、待て！」
オレの制止の声を聞き流して、そのまま立ち去って行った。オレは突き出した手を、所在なさそうにだらんと下げた。
「何か言われた？」
楓が不思議そうに尋ねる。「いや」とオレは小さく首を振った。
そして――
「……なあ、楓」
オレは細身の男子が去って言った方向を眺めながら言う。
「昼、生徒会室に案内してくれ」
†††††
生徒会室。

それはこの学校をより良くしようと立候補した生徒会役員が、活動する場所。

はっきり言ってオレにはさっぱり縁がない場所でもあった。

「てか、ここまで来たのは初めてだぜ」

『生徒会室』と書かれたドアを眺めながら、オレはつぶやいた。

「普通の人はあまり縁がないからね。それに雷牙はずっと休んでいたから、余計に近づく機会はなかったしね」

「ちょっと待ってて」と言い残して、楓はドアを開け中に入って行った。オレは何気なしにあたりを見回した。昼休憩の真っ只中なのに妙に静かな気がした。

今朝のこともあり、気が気でない。楓のためとは、一体なんなのか……。

「……雷牙、入ってもいいよ」

オレが必死に呼ばれた理由を考えていると、答えが出ぬ間に再びドアが開いた。

オレはごくっとつばを飲み込んで、ゆっくりと半開きのドアに手をかけた。

「……」

そうして恐る恐る室内に入る。最初に見えたのは、ドアのほうを空けたコの字型に並べられた長机だった。そしてその長机に設けられているパイプ椅子に数人の生徒が座っているのが見て取れた。

最後にオレの、机を挟んだ真向かいで、ゆったりと椅子に腰掛けて

いる今朝の細身の男子と目が合おうとしたその時――、

「っ、お主は！？」

オレの斜め横から驚きの声が上がった。こっちもびっくりして、無意識にそちらに目を向けると、

「……っ、どわぁっ！？」

予想外のものを見てしまい、オレは腰を抜かすことになった。

「な、なな、な――」

オレは言葉にならない声をあげつつ、腰を抜かした原因を指さした。そして一言、

「な、なんでライオンがいるんだよっ！！」

悲鳴にも似た声を張り上げた。

生徒会室には、なんと大きな獅子が鎮座していたのだ。白と黒の毛並みが美しいが、そんなことオレにはどうでもよかった。オレは部屋の端までしりもちをついたまま後ずさりして、震えだす。

「……どうしたんだい、レオン？」

オレとは反対に、獅子にかなり近いところにいる細身の男子は、平然とした様子で獅子に話しかけた。オレはたまらず怒鳴る。

「なに平然としてんだよ！」

すると、次の瞬間オレはさらに目を疑うことになる。

「……そうか、なるほどの。そういうことか」

「うわっ、しゃべった！？」
さらに驚くべきことに、獅子がはっきりと言葉を話したのだ。
な、なな、なにがどうなってんだー！？
「……。ああ、済まない。この獅子はレオンといってね。人語を話すんだ」
「はぁ！？」
細身の男子が口元に笑みを浮かべながら放った言葉に、オレは混乱した。今にも泣きそうになる。
それを察したのか、細身の男子はあははと笑いながら、
「心配しなくてもいいよ。こいつは賢いから、君を取って食ったりしない。もちろん僕たちもね。だから安心していいよ」
にこやかに言うが、到底オレはそんな言葉じゃ納得はできなかった。
な、なにこれ！　しゃべるライオンとか……。ありえねぇ。夢か、夢を見てるのかオレ！？
「ら、雷牙大丈夫？」
パニックを起こし、がくがくと震えるオレの元に楓がやってくる。
そして、
「大丈夫だよ雷牙。急にびっくりしたかもしれないけど、大丈夫。大丈夫だから……」
優しくそう言って、そっとオレを抱きしめた。
「……か、楓」

オレはすうっと落ち着いていくのを感じた。楓のやわらかな感触と甘い匂いに、優しく包まれる安心感を覚えた。

と、同時に一気に昇る血の流れ。顔が真っ赤になるのを感じた。

「か、楓っ！　は、はは、離れろ！」

「……落ち着いた？」

「おお、落ち着いたから、早く！！」

よかった。と楓はオレから離れた。その顔はオレと同様赤く染まっていた。やはり楓も恥ずかしかったのだ。

「お前っ、何恥ずかしいことしてんだよ！」

「し、知らないわよ。雷牙があんまりにも取り乱してたから、つい……」

「ついって……、お前なぁっ」

「はいはい、君たちがそういう関係なのは分かったから」

パンパンと手を叩く音と同時に、細身の男子がため息交じりに声をかける。オレははぁ？　と眉をひそめて、

「なんだよ『そういう関係』ってのは！」

「……あはは」

「笑ってごまかすな！！」

「……紅汰君みたいな感じの子だねぇー」

「はぁ？　なんで？」

オレと細身の男子が言い合っていると、別の席に座っていた車椅子の少女と、机に脚を乗っけている活発そうな少年――紅汰と呼ばれていた――が口をはさむ。リボンとネクタイの色からして、二人は二年生のようだ。

「……会長、いい加減本題に入らないと昼休憩が終わってしまいま

す」
それでもオレたちが言い合っていると、細身の男子のすぐ後ろに立っていた長髪の女生徒がぴしゃりと言い放った。お、この人は三年生か。
「ああ、そうだね。つい楽しんじゃったよ」
そう言って細身の男子はふう、と息を吐いて改めてオレのほうに視線を向けた。
「……さっきは済まないね。紹介が遅れたが、僕がこの古宮高校生徒会の会長の黒塚鎌（くろづかれん）だ。よろしくね」
「か、会長だったのかよ……」
オレはほほを引きつらせる。まじかよ……。
「そう、会長さ。……本来はここから始める予定だったのだけどね。うちのレオンが驚かせてしまったみたいで――」
「そう、それだよ！　なんなんだあれ！？」
オレはビシッと獅子を指さす。それが不愉快だったのか、レオンと呼ばれた獅子はふんと鼻を鳴らして、
「……まったく相変わらず礼儀がなっていない小僧だ」
「っ、しゃ、しゃべるとかどうなってんだよ！！」
出来るだけ獅子――レオンから体を離すようにしながら、オレは黒塚に怒鳴った。黒塚は、ん？　っと不思議そうにオレを眺めて、
「こういうのは初めてかい？」
と、にこやかに言った。
「当たり前だろ！！」
オレは間髪入れずに言い返す。すると黒塚は、「だよねー」と肩を

ひそめた。そしてゆっくりと、しりもちをついているオレのほうへ寄ってきた。

「……でも、君にはこれから『こういうこと』に慣れていってほしいんだ」

そう言って手を差し伸べる。オレは何度か黒塚の手と顔を見比べ、やがておずおずとその手を借りて立ち上がる。

「……こういうことに、慣れる……？」

オレは不審げに眉をひそめた。黒塚はオレが立ったとわかると、くるりと背を向け、

「宝条君。……君は、『魔法』の存在を信じるかい？」

０６（後書き）

生徒会の面々がちらほらと出てきました。
ちなみにこの話は、中途半端に書いて少し（そう、あまり多くないのでいつストックが切れるのか……）ためていたものをちょっとずつ分けて投稿しているのです。それゆえに言えるのですが、
主人公のＴＳが迫ってきましたよー。

07

「……は？」

オレは我が耳を疑った。

……魔法？　なんだそれは。そりゃ、魔法は知っている。ファンタジーなどでよく出るあれのことだろう。でも、なんで今それが？

「まあ、それが普通の反応だろうね。魔法なんて、こいつ何言ってんだ、ってね。

じゃあさ、フルミナ・レーゲンの話について、どう思う？」

「フルミナ・レーゲン、……確かなんかのおとぎ話の英雄様じゃなかったっけ？」

ますます話が読めなくなった。一体この会長は何がしたいのか……。

「……おとぎ話、ね。確かに世間では有名な話だよね。『おとぎ話』として」

「……あんたは何が言いたいんだよ」

オレは読めない黒塚の言動に警戒する。

「そうだねぇ、僕が言いたいのは……」

と、そこで黒塚は言葉を切り、オレのほうを向いた。その顔にはさっきまでの柔和な感じの中に、真剣みを帯びた表情が見て取れた。

そしてその表情のまま言った。

「……君には、今君が持っているその価値観はごみのようなものだと、認識してほしいんだ」

「……なんだって？」

オレがそう聞き返すと、「つまりは、だ」と黒塚は右手の人差し指

を立てた。

「君は魔法なんて存在しないし、フルミナ・レーゲンの話も作り話だ。そう思っているんだろうけど、実際はそんなことはないってことさ。魔法もフルミナ・レーゲンも、どちらも存在するんだ」

「まあ、フルミナ・レーゲンは歴史上の人物だけどね」と軽い口調で付け足す。オレはいよいよ警戒を強めた。

「なんだよ、新手の宗教勧誘か？　意味が分かんねえよ」

オレは黒塚をにらみつけた。しかし当の本人はその反応が予想できたのか、ふうと小さくため息をついた。

「……これぱっかりは実物を見てもらった方が早いか。……うーん、そうだなー。じゃあ、日向君」

「あ、はい」

黒塚は楓のほうに、少し含み笑いをしながら話を振った。

「簡単なものでいいから、宝条君に見せてあげてくれ」

「分かりました」

「か、楓…？」

オレは黒塚の言葉にうなづいた楓をまじまじと見た。簡単なものを見せるって、それは一体……。

「……ごめんね雷牙。今まで隠してて。……私もこの四月からなんだけど―」

と、小さな声で楓が何かをつぶやき始めた。

「……えっ」

すると同時に、楓の髪の色がみるみる淡い亜麻色に変化し始めた。

「な、なんだよそれ……」

「魔法だよ」
愕然とするオレに向かって、ごく自然に黒塚が言い放った。
「僕たち生徒会役員はみんな魔法が使えるんだよ。そして日向君には魔法使いの才能があったからね。この四月から役員になってもらったんだ」

「……黙っててごめんね、雷牙」
黒塚のほうに向いていた視線を、楓の声を聞き、彼女のほうに戻してみると、
「これが魔法。私は光属性が得意らしいわ」
髪が完全に淡い亜麻色に変化し、謎の光の球を手のひらに乗せた楓がそこにはいた。

「……」
オレは言葉をなくし、ただ口をあんぐりと開けて、楓の髪と謎の光弾を見比べた。
「どうだい？　少しは信じてくれるかい？」
ふふふ、と小さく笑いながら黒塚がオレを見てきた。
……なんだよこれ。魔法が存在する上に楓が魔法使いだって？
信じられない。……信じられないが――、

「……分かった。一応今はそういうことにしといてやる。そのライオンも、なんかの魔法とやらなんだろう？　……で、なんでオレがここに呼ばれたんだよ」
オレは一度目をつむって冷静になった。観念したわけではないが、一応ここは（自分の精神の為にも）納得することにした。
「うーん、レオンは魔法で動いてるわけじゃないんだけどね。まあ、それは追々」

黒塚は苦笑いしながら、がさごそと部屋の端にある机の引き出しをあさり始めた。
「えーっと、封印はしてあるはずなんだけど～っと、あったあった」
「……お主、扱いが雑であるぞ」
奇妙な小箱を取り出した黒塚に向かってしゃべる獅子――レオンが呆れ気味にうめいた。

「いいじゃないか、封印はしてあったんだから。……いいのかい？」
「……確信はないが、我の勘が正しければおそらく」
「それで十分さ」
レオンとなにやら会話（慣れないな、だってライオンがしゃべってるんだぞ？）をしていた黒塚は口元をほころばせてオレの元に来た。

「一応魔法があると認識してくれた宝条君に、これを見てもらいたいんだ」
そう言って黒塚はなにかつぶやいた後、ぱかっと小箱を開けた。
小箱の中には……、

「……ブレスレット……？」

虹色の不思議な石をかたどったシルバーのブレスレットが丁寧に入っていた。
「……これが、どうしたって？」

「手に取ってはめてみてくれないかい？」
なにやら貴重な品物な雰囲気にオレはたじろいたが、黒塚はさらっとそんなことを言ってきた。

「これを、オレが？」
「そう」

「……」
あまり手にしたことのない装飾品にオレは、手にはめるんだよな、腕時計みたいに、とか考えながらブレスレットに手を伸ばす。
そして、
触れた。
その時だった。

『やっと、見つけたよ』

声が、聞こえた。
「えっ、あ――」
オレは手を止めてあたりをうかがおうと思ったが、できなかった。
オレの手がオレの抑制を聞かず、独りでに動いたのだ。
そしてオレの腕は、ブレスレットをきっちりと腕にはめた。
瞬間――
ブワッ！
「のわっ」
ブレスレットがまばゆい光を放ち始めた。

「雷牙っ」
楓が叫びながらオレの腕を取ろうとしたが、何かに押されているかのように腕で顔をかばい、ずるずると後ろにすべっていった。
「……どうやら、当たりだったみたいだね！」
黒塚が同じく腕で顔をかばいつつも、口元に笑みを浮かべてつぶやいた。
「ちょっ、これどうなって――」
そこでブレスレットはより一層強く輝きだした。一瞬でオレの視界は光で埋め尽くされる。
同時に、ふわりと浮かんでいるような感覚に飲み込まれた。
「……っ――」
次には声が出なくなった。
意識が無理やりに体から引きはがされる感覚を味わう。
突然のことで、オレは何も考えられなかった。
一体何が起きたのか、
オレはどうなるのか、
分からなかった。
ただ、

声が聞こえた。

『君に私の力をあげたい』

女の子の声。

『……約束を、守ってね』

聞いたことがない声であったが、

その声はとても優しく

儚げであった。

†††††

……どれくらい目をつむっていただろう。

「……なっ」

だれともわからないうめき声が聞こえ、オレは恐る恐る片目を開けた。

見えたのはさっきまでと一緒の生徒会室。

違うのは軒並み椅子と机が吹っ飛んでいたのと、

それぞれ座っていた先輩方が立ち上がっていることであった。
一番近くにいたのは、黒塚であった。
彼は何かに耐える状況になっていたらしく、大きく足を広げ腰を落とし、どっしりと構えていた。
そのせいだろうか、彼の胸がすぐ近くにあって……。

……。

……おい待て。

なんかおかしくないか？

なんであんなに前傾で腰を低くしてんのに、目の前が奴の胸なんだ？

オレは今立っているはずである。
それはオレの足の感覚がそう伝えてくれている。
現にいま確認したって――、

「……ん？」
オレは自らの足元を見て眉をひそめた。

あれ？　なんか、床近くない？

しかも今オレが踏んでるのって、制服のズボンじゃない？　素足見えてるし。
「……ん、……んー？」

オレは首をかしげる。
声が、なんか変だ。普通にしゃべってるはずなのにいやに高い。こ

れじゃあ、女の子の声だ。しかも年齢が低い、おそらく小学生くらいの声だ。

「……ふぅ、あー魔封具念のため携帯しててよかった……」

オレの頭上で黒塚の安堵の声が聞こえた。

え、頭上？

『あ』

オレと黒塚は同時に間抜けな声を出した。

同時にオレは我が目を疑った。

なんだこの身長差。大人と子供くらい差があるぞ。なんで？

「こ、これはっ……」

と、オレを見て（見下ろして）黒塚は口を半開きにして震えだした。

そして――

「お、おお、お待ち帰りいいいいいい！！」

「ぎやぁ――――！！」

抱きついてきやがった！

「なんという、なんというミラクルっ」

「は、放せっ！！」

オレは全力で黒塚を引きはがしつつ叫んだ。てか、なんで声が女の子なんだよ！？　そんなつもりはないのに。

「っぅがぁ！！」

気合とともに一気に両手を突きだすと、黒塚の顔が離れると同時に、オレ自身の両腕が見えた。

……いや、長袖の袖が余りに余ってて腕は見えず、幽霊みたいな格好になっていた。

「ちょっ、なんだこれ！？」

オレは思わず叫ぶ。その叫び声もまた、可愛い女の子の声だった。

と、

ズガンっ

「あうっ」

すさまじい音とともに黒塚から力が抜ける。そしてずるずると床に倒れた。

「まったく、落ち着いてください会長」

声の主は三年の長髪の女生徒だった。その手には光沢を発する（！？）ハリセンが握られていた。

あ、いやそれ……、

「安心してください、何度使用しても錆びない特殊金属ですから」

「オレが心配してんのはそこじゃねぇ！」

思わず怒鳴る。すさまじい音がしたと思ったら、金属だったのかよ。

「ああ、会長のことですか。心配せずとも、しばらくしたら復活しますよ」
「……復活すんのかよ、あんな音出して」
てか、なに慣れたふうな口調なの？　もしかして日常茶飯事なのか？
「……ところで、あなたのお名前は宝条雷牙でよろしいですか？」
改まって、長髪の女生徒がオレを見下ろして（背高いなー）言った。
オレは首をかしげながらも一応うなづいた。
「あ、ああそうだけど……」
「え、本当に？」
横から、信じられないことでも聞いたかのような声が割り込んできた。声のほうに顔を向けてみると、そこには目を丸くしている楓がたたずんでい――、
……なんだって…？
オレは楓の姿を見て驚愕した。だって……。
「……なんかお前、でかくない？」
そう、オレから見た楓の大きさが明らかに違ったからだ。
本来、オレの頭一つ分くらい下のはずの楓の身長は、今はまったくの逆立場になっている。
その大きくなった楓はおろおろと手を動かしながら、
「いや、私が大きくなったんじゃなくて、雷牙が小さくなったんだよ！」

なんてことを言ってきた。

「はぁ？　オレが小さくなっ…ただ……て……」

楓のその発言に鼻で笑いつつ、楓から視線を外すと、オレの視線は『あるもの』に釘付けになった。途端に声が尻すぼみになる。

オレの視線の先には、どこから持ってきたのか全身を映せる縦長の鏡が置いてあった。その隣には三年の長髪の女生徒がいたのだが、それには一切目がいかなかった。

鏡には基本、目の前にあるものを映す性質がある。

今はオレが目の前にいるわけだから、その性質からすると当然オレが映っているはずだ。

……なのに、今映っているのは――、

「……だ、誰だよ。こいつ……？」

映っていたのは、……可愛らしい少女だった。

見たところ、十代前半、下手をすれば十にも満たないと思われる少女である。

鏡の中の、蛍光灯の光の加減で虹色に光る不思議な金髪をした少女は、なぜか全くその丈に会っていない制服の長袖シャツを着ており、そのシャツは膝のあたりまでだらしなく垂れていた。その下からすらりと細くきれいな足がのぞいている。

その少女が、

鏡の中から、

オレを見つめていた。

全くオレと同じポーズで。

オレはあたりを見回し、その少女の姿を探した。
するとどうしたことか、鏡の中の少女も同様に鏡の中を見回した。
再び目が合う。その顔はオレと同じく混乱に満ちているようだった。
オレはがっと鏡をつかむ。同じ動きを少女もする。

そこで
ある仮説が、オレの中に湧き上がる。
言っておくが、最悪の仮説だ。

「……なあ楓」

オレは楓に、顔をひきつらせながら、つぶやく。

「……これって……オレ？」

楓の返答は、

「……うん」
オレにとって最悪の仮説を証明するものであった。

07（後書き）

ＴＳ、ついにしてくれました。

これは新ヒロイン誕生と、言えるのでしょうか……？

08

「……君が付けてくれたブレスレットは、実は特殊なものでね」
愕然と鏡を見ているオレの横で、頭を押さえつつも平然とした様子で黒塚が立ち上がる。
「何が特殊なのかというと、使用者を選別するんだよ」
「……」

「……選別、ですか？」
オレが鏡に釘付けで反応しないことを悟り、代わりに楓が黒塚の相手をする。
黒塚は楓の問いかけにうなづいて、
「そう。まあ選別するといっても、そのものによって方式はずいぶんと変わるけどね。……それが見つかった当初は、僕は『一定以上の魔力を有するもの』を選別しているのかと思ったんだ。だってそれは――」

かの英雄、フルミナ・レーゲンのものだから。

「まじでかっ！？」
反応したのは、オレを呆然と眺めていた活発そうな少年―紅汰であった。
その反応に黒塚は意外そうな顔をして、
「おや、言ってなかったかな君には？」
「君には！？　え、オイラだけ？　……そうなのか歩美？」
「え、あ～……。……そういえばあの時、紅汰君はいなかったねぇ

ー」
「なんでぇ！？　『あの時』てのはぁっ！！」
あはは、と車いすの少女――歩美は笑う。他の役員たちも（といってもオレは話が読めなかった。楓も同じらしい。てか、オレはそれどころではなかった）『あー……』と気まずそうな顔をする。
「まあまあ。……とにかくそのブレスレットはフルミナ・レーゲンのものなんだ。それはレオンが保証してくれるよ。なにせレオンは、実際にフルミナ・レーゲンを見たことがあるらしいからね」
「……まあ、肝心のところには鉢合わせなかったがな……」
皮肉気にレオンはつぶやく。そして、ふっと鼻を鳴らすとオレのほうを向いて言った。
「……宝条雷牙」
「っ！？」
未だにライオンが目前で話すという非常識に慣れないオレは、蛇ににらまれたカエルのごとく固まった。
それにレオンは一瞬不快そうな顔をした後、毅然とした態度で、
「はっきりと言わせてもらおう。……そのブレスレットは、『お主だから』反応したのだ」
「……オレ、だから……？」
うまく言葉を飲み込めないまま、オレは聞き返した。
「『一定以上の魔力を有するもの』……。それは大きな間違いだ。現にお主は、それなりな魔力を有しているようだが、お主を遥かに凌ぐ魔力の保持者でも其れを発動させることは出来なかった。……当然だ。条件はそんなことではなかったのだからな」
淡々と、レオンは言う。

「そやつの発動条件は……、『使用者が宝条雷牙であること』だ」
……オレははっきり言って意味が分からなかった。
発動条件が『オレだから』――
「……なんだよ、なんでそんなこと分かるんだ？　てか、なんでオレなんだよ？」

「それが小娘……フルミナ・レーゲンの望みだからだ」
「……意味わからねえ？　フルミナ・レーゲンはおとぎ話の……いや、現実だって言ってたな。でも、遥か昔の人物だろう？　それがなんでオレを条件にしてるんだよ？」
至極当然の疑問だった。オレは一度もフルミナ・レーゲンに会ったことがない。当然だ。だってついさっきまで、オレはおとぎ話と思っていたくらいだ。実際におとぎ話の人物に会ったことがあるとか、そんなの信じられるわけがない。

「……いずれ分かる。その時を待つのだな」
そう言って話は終わったとばかりに、レオンはそっぽをむいた。オレは反論するどころか、頭の整理もロクにできていなかった。
だって、色々なことが立て続けに起こって、正直夢を見ているみたいだ。
いや、夢なのかもしかして……。現実のオレは、今頃どっかの授業中に寝ているんじゃないかなー、なんて……。

「……いててっ！」

思わず声が出る。無意識にほほをつねっていたようだ。
……あれ、痛い？

「……（萌え）、っごほん。……ところでレオン。宝条君のこの姿はもしかしなくても……」
黒塚が呆然とするオレを見ながら（その顔はなぜか緩んでいる）、レオンに問いかける。
するとレオンはしれっと答えた。
「ああ、間違いなく幼少の小娘だろう。顔の雰囲気が同じだ。おおかた、小僧の魔力が小娘の魔力と釣り合うのが、この程度の年齢だったのだろう」

「なるほど。ナイスだよ宝条君、絶妙な魔力加減だね！」
ぐっと、黒塚がオレに向けて親指を立ててくる。オレは生気のない顔でそれを見つめる。

「……なあ、楓」
オレはぎぎぎと錆びた機械みたいにぎこちなく楓のほうを振り返る。
「はは、……これって全部、夢……だよな？　いや、夢だろう！夢と言ってくれ！！」
徐々に悲壮感を漂わせながら楓に助けを乞う。

だが……。
「……言いにくいけど。すべて現実なんだよ、雷牙……」
申し訳なさそうに楓は言ってくれやがった。
「そこは夢落ちだろぉー……」
がくっと肩を落とし、オレは床にへたり込んだ。無意識に女の子座りになったが、オレは気が付かないくらい疲弊していた。

「なんだよ、それ……。いきなり変なしゃべるライオンとかいるし、魔法があるとか言われるし、あげくオレ女の子になっちゃうし――」

……ん？　女の子……？

「……おい待て。ちょっと待て。……オレ、元の姿に戻れるのか！？」

がばっと顔を上げて、オレは近くにいた黒塚を見上げた。すると黒塚は他人事のように、

「んー、別にそのままでいいじゃないかい？　可愛いし」

「真面目に答えろ！！」

「えー、そこは『可愛い』って言われたことに恥ずかしがってほしかったなー。顔を赤らめて『な、何言ってんのよ！？　ほ、ほめてもなにも出ないわよっ！』ってさ。せっかく絵にかいたようなツンデレボイスなんだから」

「殴るぞてめぇ！！」

「……ははは」

「だから笑ってごまかすなっての！」

「んもー、仕方ないなぁ」

「あー、その顔（二重の意味で）死ぬほど殴りたいっ！！」

オレが今にもかみつく勢いで怒鳴ると、「まぁ、いいか」と黒塚はつぶやいた。

そしておもむろに例のブレスレット――今はしっかりとオレの腕にはめられている――を指さした。

「戻れるよ。簡単なことさ。そのブレスレットを反応させている魔力の流れを切ればいいんだよ。本来は君じゃ制御できないような魔力の流れだけど、今は魔封具を付けさせてもらってるからね、君でも十分可能なはずだ」

「そ、そうか」

オレは握りしめていた拳を緩め、ふぅ、とオレは安堵のため息をつく。一応戻れる手段はあるみたいだ。さて、それじゃさっそくこの姿からはおさらば――

そこでふと『肝心なこと』に気が付く。

……平然と聞き流してたけど……

「……魔力の流れって……なに？　どう制御するの？」

08（後書き）

愉快な生徒会だなー。
いいかどうかは別として。

09

「……魔力の流れって……なに？　どう制御するの？」

「ま、そういうことだね」

分かりきっていた質問だったのだろう、黒塚が肩をひそめた。

「魔力制御なんて一般の人が知るわけないよね。……これぱっかりは感覚的なことだから、なんとも言えないし。慣れるのが一番早いよ」

「……慣れるのにどれくらいかかるんだ？」

恐る恐るオレは尋ねる。すると黒塚は少し考える素振りを見せた。

「うーん、どうかなぁ……。瑞希君、君は慣れるのにどのくらいかかった？」

「……二日くらいかと」

と、三年生の長髪の女生徒が答えた。

「夏目君は？」

「えー、どうだったかな。……知らね。一週間くらいじゃねーか？　オイラ魔力制御は得意じゃねーし」

紅汰が少し考えた後、投げやりに答えた。

「弥栄君は？」

「え～、そうですね～。わたしは半日で慣れましたけど」

「え、マジで！？　早くねお前？」

「うん、『あの頃は』ね～」

あはは～、と歩美は困ったように笑った。その言葉に紅汰は「うっ」と言葉を詰まらせた。

「……すまねぇ」
そして紅汰は申し訳なさそうに歩美に謝った。歩美は気にしていないという風に朗らかに笑った。

「うーん、じゃあ山城君は？」
そう言って黒塚は今まで一言も発していない、大柄の男子生徒に声をかけた。
大柄の生徒は思案するように身をよじらせた後、
「五日、ほど」
重みのある声で言った。

「なるほどねー。そして確か日向君は三日だったよね？」
「あ、はい。そのくらいです」
「……だってさ宝条君。平均すると三，四日くらいかな？」
実に軽い口調で黒塚は言った。しかしそれはオレにとっては死刑宣告とも同然であり……、

「……嘘、だろ……。……じゃあ、その間ずっとオレはこの格好なのか？」
わなわなと震えながらオレは黒塚にすがる思いで問いただす。黒塚は苦笑いしながら、

「うーん、まあ自由に制御できるように慣れるまでってことだから、ずっとその姿でいる必要はないけど。……不完全な状態で魔力制御しても、かえって危険だからねー。『その姿のままのほうが望ましい』……てとこかな？」
「……まじかよ……」
再び、がくっとオレは肩を落とした。その肩にぽんと黒塚が手を置いてきた。

「慣れたらすぐだから。それに、君に魔力の才能があったら、弥栄君みたく半日で慣れることができるかもしれないよ？」
「……ほんとか？」
「……ウン、キットネ！」
「……てめえ、絶対無理とか思ってるだろ」
恨めしそうにオレは呻いた。あははー、と白々しい笑いを黒塚は返してきた。

するとそこでなにか閃いたのか、黒塚はにやりと小さく口元をゆがめた。
「あー、そういえばもっと手っ取り早い方法があるかなー」
「っ、ホントか！？」
残念ながらオレは黒塚の『にやり』に気付かずに話に食いつく。黒塚は一度うなづいて、

「当たり前のことだけどね、今君が魔力をブレスレットに流してる……まあ、君の場合無意識だからブレスレットに吸われてるって言ってもいいかな？　とにかく、そうやって魔力は循環してる。そういうことなら、一度ブレスレットに干渉されないように取っちゃえばいいよね」
「おお、確かに」

そう言ってオレはさっそくブレスレットに手をかける。……なにかブレスレットを覆うように変な装飾がいつの間にか付けられているが、それごとオレは取り外そうとしたところ、

「……ただし」

黒塚がオレの行動を遮るように言葉を発した。
「取り外すには、まずそのブレスレットを覆っている魔封具を取ら

ないといけないんだよね。さっきブレスレットが反応した時に慌てて僕が付けたんだけど、魔封具ってどんなものだと思う？」
黒塚が質問してくる。オレは一度ブレスレットから軽く手を離して、少し思案。

「……『魔封具』、だろ？　聞いた感じだと、魔力を封じる、みたいな感じか？」
「そんな感じだね。正確には、魔力の流れを制限するものなんだけど。……さて、じゃあその魔封具。どうして僕は『慌てて』それを付けたと思う？」
「そりゃー……魔力の流れが強かったから……？」
「何で魔力の流れが強いといけないのかな？」
「……知らねえよ。分かるわけないだろ。オレは今まで魔力なんてかけらも――」
「答えは、君の体が持たないからだよ」
オレの声を遮って、やや真剣に黒塚は言った。
「おそらくそのブレスレットには、膨大な魔力が溜め込まれてる。その魔力が制御できないまま一気に君に流れようとしたんだよ。多すぎる魔力は人体には害だからね、そうだなー」
そう言って黒塚は宙を眺めた後、さらっと言った。
「……魔封具取っちゃったら、今の君じゃ消し飛んじゃってたね！」
「消し飛ぶって……そんなアホな……」
「冗談じゃないよ？　現にそこの山城君は、一回それで死の淵まで行ったんだから」
黒塚の言葉に、山城は小さくうなづいた。ついでに、歩美の顔を少

し苦しげにゆがむ。
「……嘘は言ってないぜ一年。詳しくは言わねえが、堅冶のやつは膨大な魔力にやられて死にかけたことがある。なんとか今は生きてるけどな。……代償はでかいんだよ」
黒塚に賛同するように紅汰が言った。その表情には、一切の冗談は含まれていないようだった。
上級生たちが真面目に、黒塚の言葉は真実であると物語っていた。
……じゃあ、本当にこいつを取ったら、オレは消し飛ぶのか……？
「……まあ、消し飛ぶかどうかやってみたければ、どうぞお試しあれ。取れるものなら、取ってみるといい。……でも、生きてたらかなりの魔力を得ることができるだろうけどね。……『生きてたら』の話だけど」
オレの迷いを読み取ったのか、とどめとばかりに黒塚が皮肉たっぷりに言い放った。
オレはちらと魔封具を横目で見たが、やがて視線を外し、ついでに近づけていた手も離した。
「……そんなこと言われたら、取れないだろうが……」
オレはため息をついてブレスレットを取ることを断念した。
「あはは、分かってくれて助かるよ」
「……てか、そうと分かってたんなら、変に期待させるなよ」
「後学のためだよ」
恨めしそうにオレは黒塚をにらむが、彼は全く気にしていないようにあっけらかんと言った。

と、そこで昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴った。

09（後書き）

変に伏線張ろうとするから、後々厳しくなるんですよね。わかります。

……わかっている、つもりなん…です……けどね。

10

「おっと、いったん集まりはここで終了だね。続きは放課後にしようか」

黒塚はそう言って一足先に生徒会室から出ようとする。オレはその黒塚の背中に呼びかける。

「あ、おい待て。オレは一体どうしたらいいんだよ！　このままじゃ授業どころか、部屋からも出られねえぞ！？」

そう言ってオレはばんばんと薄い胸をたたいた。今のオレの服装は――服装と言うのもおこがましいが――制服の長袖シャツ一枚である。これで平然と歩く勇気はオレにはない。ほしくもないが……。

黒塚は少し首を傾げた後、

「うーん、……まあ放課後には戻るから」

「投げるなーっ！！」

さっさと部屋を後にした。

くそっ、あの野郎いつかつぶしてやる……っ！

「……お気の毒ですが、放課後までここで待っていただくのが最良かと」

と、黒塚から瑞希と呼ばれた三年生が冷静に言った。オレは苦い顔をする。

「いや、でも……」

「んー、まあ水穂先輩が言うんなら仕方ねぇよな。あきらめろ一年」

やれやれと肩をすぼめながら紅汰は言い、

「ま、これからよろしくな。んじゃ、お先―」

そそくさと部屋を出て行った。

「くっそー、人の気も知らないで……」
オレは紅汰が出て行ったドアに恨み言をぶつけた。
「……ごめんねぇ、わたしたちも授業があるから。ちゃんと放課後には相手をするからね～」
「……ごめん、失礼する」
「ちょ、アンタらまでー……」
歩美の車いすを山城が押す。二人は申し訳なさそうな顔をしながらも、やっぱり部屋を後にした。

「……雷牙」
そこでぼそっとつぶやいたのは楓だった。呆然とドアを眺めていたオレは、すがるように楓を振り返った。

「な、なんとかならないか楓！？　てか、お前も魔法が使えるんだろ？　教えてくれ！　どうやって魔力を制御してるんだ！？」
それに楓は非常に困った顔をする。
「えー……、うーん。……私もまだまだ初心者だから、自分がどうやって制御しているのかよく分からないというか、言葉にできないの。なんとなくこんな感じかな、みたいなものだから、教えるまではちょっと……」

その言葉に、オレも非常に困った顔をする。
「そうか……。あ、じゃああの三年生の先輩はどうだ？　確か水穂とか呼ばれてた女の先輩……て、いねーし！？」
はっと気が付いて先ほどまで例の三年生の女の先輩――水穂が苗字かな――がいた場所を振り返ったオレは、そこに誰もいないことに驚愕した。

「あ、水穂先輩ならさっき出て行ったけど……」
「忍者かあの人は！？」
いや、女だからくノ一か？
……ではなく。足音一つたてなかったことに、オレはそう評価した。
と、そこで壁に掛けてある時計に目がいった。そこには、午後の授業がもうあと二，三分で始まるということが示されていた。
オレは、おろおろとオレを気遣って部屋から出ようとしない楓を見て、腹をくくった。

「……あーもう、仕方ないから放課後まで待つ！　……だから授業に行って来いよ楓」
「え、でも……」
「オレのことはいいから！　どうせオレはこっから動けん。いまさら授業サボっても変わりはしないし。でも、お前はそうじゃないだろ。だから行って来いよ。オレのことは適当に頭が痛むから病院に行ったとか言っておいてくれ」

そう言うと、楓は申し訳なさそうな顔をしながら踵を返した。
「……ごめんね雷牙。放課後、すぐ来るから！」
頭だけこちらに向けてそう言った後、楓は早足で部屋を出て行った。
生徒会室に、半裸の少女―不本意ながらオレ―だけが残された。
……いや、オレだけではなかった。

「……つくづく、妙な縁であるな」

「っ！？」
オレは声のした方を、ばっと振り向いた。
「お前、いたのかよっ。……そういえば、お前も出られないよなここから。出たら大騒ぎだろうし」
声の主――人語を話す獅子、レオンを見ながら、オレは身を縮めた。
「……そんなに警戒をするな、といっても無駄なのだろうがな」
オレの様子に、レオンはため息交じりにつぶやいた。
「まあよい。一応言っておくが、お主をどうこうするつもりはさらさらないぞ」

「……」
オレはじっとレオンを見つめる。レオンは余裕さえ感じられる様子でオレを見つめ返してきた。
……その威圧感に耐えられずに、オレは恐る恐る口を開いた。
「……お前は、一体なんなの？　やっぱりなんかの魔法なのか？」

「……『なにか』か」
また面倒な質問だ、とでも言いたそうに、レオンは眉をひそめた。
「……お主が考えている魔法とやらが、なにを示しているのかは知らんが、我は魔法で動いているわけではない。まあ、それに近い存在と言えるかもしれんがな」

……。

「……はい？」

さっぱりわからない。

「……余計なことを言ってしまったようであるな」
はあ、とため息交じりにレオンは仕切りなおした。
「簡潔に言うと、我は聖獣の一種だ。主らの魔力を媒介にして、召喚されそして具現化した、主らとは異なる存在である」

「……召喚、ね」
オレは思わずつぶやいた。
「……なあ。これ、本気で夢じゃないんだよな？」
オレは往生際悪く、尋ねる。レオンもオレの気持を察したのか、
「……気持ちはわかるが、慣れろ。これは夢ではない。こういう世界に、お主は足を踏み入れたのだ」
ばっさりとオレの希望を切り捨てた。オレは、がくっと肩を落とす。勢いで顔もうつむく。

しかし、

「……まあいいよ。……さすがにもう、この世界に実は魔法があるっていうのは納得した。お前みたいなやつもいるってこともな。でもさ――」

ばんっ、と（薄い）胸をたたきながらオレは勢いよく顔を上げて訴えた。
「なんでオレはこんな格好にならなくちゃいけないんだよ！？」

こんな格好というのは、もちろんこの女の子の状態のことだ。どうやらレオン曰く、フルミナ・レーゲンのものらしいが、こればっかりは納得いかない。無理やりに女装させられた気分だ！　いや、女装なんてレベルではないけども。

オレの訴えなんて気にも留めていなさそうな様子のレオンは、

「……異なる身体の割には、ずいぶんと馴染んでおるようだし、拒絶反応も見られない。別に何も問題ないであろう」
「大ありだっ！！」

「それよりも小僧」
そう言ってレオンは、部屋の隅のロッカーのほうに顎をしゃくった。
「その恰好ではあまりに見苦しい。あの中にあるものにでも着がえておけ」
「み、見苦しいってなぁ……っ」
言いつつオレは、自分の今の格好を見下ろす。
男物の制服のカッターシャツ一枚。そして、さっきから床に座りっぱなしで、冷たくなっているであろうきれいで小さな足が、その先からちょこんと見えている。
さらには、時折ヒートアップしたせいか、上からも下からもボタンが外れている。

……。

「……そうですね、アナタサマの言うとおりですね」
いくら子供の体とはいえ、そこは異性の半裸姿。オレは真っ赤になりながら立ち上がり、誰の視線もあるわけではないのに（レオンははなっから向こうむいていたし、……あるとしたら、オレ自身？）両手で必死にはだけたシャツを寄せ、体を隠した。そして、いそいそとレオンの言ったロッカーへと向かった。

１０（後書き）

部屋にライオンと二人（？）って、怖いなー。ただのライオンじゃないけど。

そして、ストックが、少なく……なって……きた。

11

「……」
ぎぃ、と金属製のロッカーを開け中を見たオレは、正直に眉を寄せた。
「……なあ、聞いてもいいか？」
「なんだ」
「……これ、なに？」
「見ればわかるであろう、服だ」
「いや、そりゃ服なんだろうけどさ。じゃ、言い方変えよう、……なんでこんなもんがあんの？」
ロッカーの中には、様々なもののほかに、確かに服が一着掛けてあった。それの正式名称があるのか、オレは知らないけれども、この服がこういう言われ方をしているのは、聞いたことがある。
『ゴスロリ衣装』と
「知らぬ。意気揚々と黒塚の道化が持っていたのは知っておるが」

「なんでこんなもん持ってんだよあいつ！？」
「知りたければ本人に聞けばよいであろう」
「うわー聞いといてなんだが、なんか知りたくねぇ！！」
「いいから、今はそれを着ておれ」
「いやいや、こんなもん見たことねえし！　着方なんか分からねえよ！　おまけにサイズだって……」

そう言いつつも、これしかなさそうなので必死に着ようと試みた。
なんとか着れたところで、オレは一言、
「うわっ、サイズぴったりなんだけど、なんで！？　こわっ」

初めての着心地に、少し興奮。ついでに黒塚に恐怖。

……まさかこうなることを予測……してないわな、あいつも驚いていたし。え……じゃあ、何……。

「……どうでもいいが、話をしてもいいか？」
「え？」
ふんわりした袖やスカートを、物珍しく眺めていたオレはレオンの声に視線を移した。

「改めて言うが、その姿はフルミナ・レーゲンのものだ。故にお主にもその力が使えてもなんら不思議はない」
そう言ってレオンはおもむろに、ふうっと息を吐いた。
すると口元に小さな透明な結晶が現れた。その結晶はレオンの意志に沿うように、視線の先にいるオレの元にやってきた。

「それは、お主の属性の適性をはかるものだ。火なら赤、風なら緑という感じで各々色の光を発してくれる。……軽く手のひらを当て

てみるがよい」

「属性の適性……、そういえば楓の奴は光がどうとか言っていたな。もしかして、それか？」

「そうだ。早く触れてみるといい」

オレはごくっと唾を飲み込んで、ゆっくりと属性の適性を調べてくれるという結晶に触れた。

さて、オレの適性とやらは一体なんなのか。

いや、オレの適性じゃないか。どちらかというと、フルミナ・レーゲンの……。

「……なんだ、これ？」

くじを引く前のような緊張を解いて、オレは結果をだした結晶を見ると、ぽつんとつぶやいた。

「おい、結局これはなんなんだ？」

驚くことに、結晶は虹色に輝き、かと思ったら薄紫色に変わったりと、はた目には結果がよく分からない状態であった。

「これ、まさかの失敗とかなのか？」

結晶を指さしながらオレはレオンに聞いた。

するとレオンは首を横に振った。心なしか、その顔には、予想を裏切らなかったという喜びのようなものが見てとれる気がする。

「失敗などではない。それがお主の適性なのだ」

レオンが操作したのか、結晶はオレの元を離れレオンの近くに浮遊

し始めた。
オレは肩をすくめて、
「適性って言ったって、それじゃあなにが適性なのか分からないだろうよ。まさか、虹色ってことは、まさか全属性にオレは適性あるってか？」
そんな反則あるわけない、と思ったオレは冗談半分でそう言う。

しかしレオンは真顔で、
「その、まさかだ」
そう言ってのけた。

オレはあっさりと反則……なのか知らないが、それがまかり通ったことに、感動よりも先に複雑そうに眉をひそめた。
「……はあ。やっぱりそれって、すごいことなのか？」

そもそもの基準を知らないので、オレはレオンに確認をとってみた。
レオンは小さくうなづいて、
「非常に稀有……いや、唯一と言ってもいいのかもしれぬな。三色や四色を操る者はいるのだが、全色操れるのは、我が見てきた中ではあるが、お主のその身体の持ち主……フルミナ・レーゲンだけであろうな」

「へ、へえ。さすがは英雄様だな。……あ、それじゃあ、あの薄紫色はなんなんだ？　一色だけ個別で現れたやつ。まさか、あれがオレ自身の適性ってやつ？」

オレは小さな体になった自分を見下ろしたあと、不意に出てきた疑問をひっさげ顔を上げた。
「そうだな。正確に言うなら、フルミナの力をまともに引き出せる

のがその属性、というところだがな」
「ふーん。……でもさ、一応オレ自身はその属性なわけだな。ちなみに、薄紫色って何属性？」
オレの属性、というところに期待を持って聞いてみる。
さて、薄紫とはなんであろうか。

「薄紫は雷であるな」

「へー、雷かあ、雷ねえ……。……それって、名前で決めたるわけじゃ、ないよな？」
一応、といった感じでオレは尋ねる。
オレの名前が雷牙だから雷とかだったら、あまりに安易すぎる……。
「そんなわけがないであろう。名前ではなく、ちゃんとお主の天性の適性をみているわけなのだからな」
「そ、そうだよな」
あはは、とオレは軽い笑い声を出した。生徒会室に乾いた小さな女の子の笑い声がひびく。

「……で、魔力制御が分からないから、どっちにせよ使えないと……」

「そうだな」

「ついでに言うと、元にも戻れないと」

「仕方あるまい」

はぁー、とオレはため息をつきつつ、ガションとロッカーに背を預ける。

すると、ごと、と中から物音がした。

「……ん？」

いったん背を離したオレは、物音の正体を確認すべく改めてロッカーを開けた。

すると――

「えっ、うわ――」

ガチャーン！！

大きな音を立てて、ロッカーから何かが倒れてきた。かろうじて身を反らして激突を回避したオレは、倒れてきたものの正体を確認した。

「……って」

確認した途端、オレは真っ青になる。
「あ、あ、ああ、あっぶねぇなあ！！」
倒れてきたのは、オレの身長はありそうな（元の体だったら、そうは表現しないがなっ！）金属の板であった。こんなのに轢かれた日には、たまったものじゃない。
てか、なんだこの金属の板――
……いや、ただの金属の板……ではないようだ。
「……剣か、これ？」
よく見ると鞘がついているようだが、徐々に先が細くなり先はとがっているようだし、反対側には鍔らしき物も、にぎりも見て取れる。ゲームなどでよく見る剣。しかもこれは大剣のようだ。
「いや、なんでこんなもん……てか、この服といいこの大剣といい、なんだこのロッカー！」
中身が混沌としている。どっからこんなもの仕入れてくるのだろうか。
「まったく、騒がしい奴よ。少しは落ち着かんか」
「こんなのがあるこの部屋がおかしい！」
ため息交じりのレオンに対し、オレは抗議の声を出す。
「……まあ、その服に関しては何とも言えぬが、その剣に関しては大して問題ではあるまい。これからはお主も必要となるのだぞ？」
諭すようにレオンが言った。オレは眉をひそめる。

「は？　剣が必要になるって……そういえば、お前らは魔法を何に使ってるわけ？」

「ん？　それこそ愚問であろう」

ふん、とレオンは鼻を鳴らして、

「もちろん、戦うためだ。魔物と……あるいは魔法使い同士で、な」

11（後書き）

ファッションについては、知識も文章力も低いのであまり期待しないでください。すみません。
これは次回にも言えることです。

というか、服の話が出るたびに言えることです……。本当に申し訳ないです……。

11，5

『もちろん、戦うためだ。魔物と……あるいは魔法使い同士で、な』

なんだよそれ……とも思うし、同時にだろうな、とも思う。

確かに、ゲームやらなんやらで『魔法』と出てきたら、その使用目的は戦いである場合がほとんどだと思う。剣なんて、戦いの道具そのものであろう。……儀礼用とかは省いて。

しかし……しかしだ。

だったら、何故この世の中にまだ魔法は存在するのか。

『もともと便利だったものだ。大衆に忘れ去られていっても、細々と伝えていったところもあるのであろう。だが、理由はそれだけではない。最大の理由は、フルミナ・レーゲンの施した魔界への結界が完璧ではなかったこと、そして魔界だけではない別の世界からの干渉があるということだ』

レオンに聞いたところ、そういう返答がきた。

このことにより、もともと魔法の才能を持っていた人物が、その才能を腐らせてしまう前に、魔法がある裏社会的世界に参加してもらう機会があるという。

現実世界観では、魔法とか、魔物とか、異世界とか……そんなものは見ること、感じることがないのかもしれないが、確かに魔法や魔

物や異世界は存在する。
故に魔法や剣が、戦いの道具としていまだに残っている……オレが知らなかっただけで、世界は『そういうもの』だったらしい。

……正直、悪い冗談だと思いたい。

「……ん？　どうしたの雷牙？」
オレがなにやら深刻な顔で思案しているのが気になったのか、楓がオレを見下ろしながら言う。
……ああ、そうそう。悪い冗談と言えば……。

「……なんでこうなった……」

オレはがくっと肩を落とした。
オレが今いるのは、洋服店であった。

女性用の。

「だってー、その恰好だけじゃ物足りないでしょ～？」
「それに下着だって必要だろうし」
「女性の嗜み（たしなみ）です」
そう言ってきたのは生徒会の女性陣。順に弥栄歩美、日向楓、水穂

瑞希の順だ。歩美の車いすは、楓が押している。
時は放課後、一回生徒会室に集まった役員たちは、オレの魔法制御訓練をする前に、オレの姿を見て暴走し始めた黒塚を黙らして、オレの女性用服を揃えることから始めることにした。
さすがにゴスロリ衣装で出歩くわけにもいかなかったので、とりあえず楓が一度帰って持ってきたお古を着こんで、ここにやってきたというわけだ。

ちなみに、ここに来たのは女性陣（そのなかにオレがしっかり入っているのは、はなはだ遺憾）だけで、あとは生徒会室で待機だ。

「あー、もうなんでもいい。なんでもいいから早くここから出たい……」
辺りは女性だらけ。売ってる服も女性用。雰囲気もファンシーなこの空間は落ち着かない。

だってオレ男だし！！

オレはため息をつきつつそう言うが、周りのテンションはそれを許してくれない。
「そうはいかないわよ。今は私のお古を着てもらってるけど、あんまり残ってないから必要になるわよ。それに、さっきも言ったけど下着だって必要でしょ？」
楓がオレをたしなめるように言う。他の二人も、うんうんと頷く。

「……あー、そうだな。確かにそうかも知れんがな……」
オレはほおをひくひくさせながら言う。
正直、ちょっと迷った。言っていいものか。もしかしたら、オレのためなんだろうかと思ったから。
だけど、もう我慢できん。
オレは口を大きく開いた。

「お前ら、オレを着せ替え人形にして楽しんでいやがるだろっ！！」

そう、さっきからオレは女性陣から着せ替え人形の如き扱いを受けていた。
最初のほうは、まだ普通の服と呼べるものを選ばれていたが、やがてそれは『衣装』と呼べるような手の込んだものになり、あげく今はドレスを着せられていた。

「えー、そんなことないよ～」
朗らかに歩美が笑う。

「あ、でもー」

と歩美は一度水穂のほうを向いた。それでなにか察したのか、水穂は小さく微笑む。
「確かにー、服を選んだのは私たちだけど～」
「実際に着たのは、あなたではないのですか？」
「あ、そうよね」

「ぐっ！？」

先輩二人に、見事にはめられた。オレはぶんぶんと両手を横に振る。
「こ、これはあんたらが持ってくるからで、別にオレは選んできたものを着ないというのは悪いなと思ってし、仕方なくだなぁ……っ」
「……もしかして、こういうの着てみたかったりしたの？　雷牙？」
楓がオレの顔を覗き込むようにながら言ってきた。オレはそっぽを向く。
「だ、だれがっ」

まあ、この姿には似合うかなー、なんて思ったりはしたが断じてオレは着たかったわけではない。……はず。
オレのその様子に、楓はしばらくいたづらを楽しんでいるかのような表情をしていたが、やがて顔を上げ近くの掛け時計を見た。

「あ、結構経ってますね。そろそろ戻りませんか？」
そう先輩方に言った。その二人も各々時計を確認（歩美は確認できているかわからないが）して、頷いた。

「え、戻るって……着てばっかりで、まともに選んでないんじゃないのか？」
オレは疑問に思って明後日のほうを向いていた顔を戻してそう尋ねた。すると楓がにこやかに、どこからか紙袋を取り出した。
「大丈夫。ちゃんと選んでよかったやつは、もう買ってあるのよ」
ぱんぱんと紙袋を軽くたたく。

……それじゃあ、なにか？

「と、いうことは。……その後のこれらは、みんな着せて遊んでたんじゃねえか！」

ばん、とオレはドレスの胸のあたりを叩いた。
「あはは、まあいいじゃない。着たかったんでしょ？」
「よくねぇし、着たいわけじゃないっての！！」
あはは、と女性陣が笑う中、オレは不機嫌そうに顔をゆがませ、再びそっぽを向いた。

「ごめん雷牙。このあとはちゃんと訓練を手伝ってあげるから、ね？」
笑いをやめてそう言ってきた楓を横目で眺めた後、オレは、

「……着替えてくる」
試着室のカーテンを乱暴にひいた。

１１，５（後書き）

改めて見て、すごく間話な雰囲気がしたので０，５話ということにさせていただきました。
少しだけでも、雷牙にフルミナっぽさを出したくて入れたのですが……どう、でしょうかね？

12

「……さて、それじゃあ魔力制御の訓練をしようか」

「……」

オレは何とも言えない表情で黒塚を見る。

服を買って生徒会室に帰ってきたオレは、動きやすい方が良いと思い、さっそく買ってきた短パンスタイルに着がえ、さてやるかと気合を入れた。

一方黒塚の奴は、オレの姿に「ボーイッシュも悪くないねえ！」と興奮しだしたが、水穂に黙らされていた。

さっきの言葉は、頭にでかいこぶを作りながらの発言であった。

「と、いっても最初にできることなんてそんなにないから、付き添いは僕だけでもいいんだけどね。みんなは帰りたかったら帰ってもいいよ」

「お、そうか？　んじゃ、お言葉に甘えて」

そう言って紅汰がそそくさとバッグを手に取り始めた。

「堅治、歩美。どうせオイラ達ができることはないんだ。帰ろうぜ」

言われた山城と歩美はほかの役員たちを眺めたが、やがて各々バッグを取り始めた。

「ごめんねー、お先に失礼しますー。頑張って魔法使えるようになってね～」

「……頑張れ。お疲れ様でした」

「ああ、お疲れ様」
黒塚が返事をすると、二人は先に出た紅汰の後を追って部屋を後にした。

「……瑞希君は帰らないのかい？」
ちらと、水穂を見ながら黒塚は言った。すると水穂は、
「会長がなにか仕出かすのではないかと、心配なので残ります」
「あはは、信用薄いなー」
黒塚は苦笑いを浮かべ、今度はレオンのほうを見た。

「レオンは、弥栄君のとこについて行かなくてもいいのかい？」
「……悪いが、見届けるつもりだ」

「あれ？　弥栄先輩のとこについて行くって……レオンはここから出られないんじゃないのか？」
オレはレオンを見ながら疑問を言った。するとレオンが、
「我は召喚されてここへきた聖獣であり、召喚主は歩美だ。そして、召喚されたものは、おおかた召喚主を守ろうとする。そのために、どこへでも召喚主について行けるよう、姿を消すことができるのだ。正確には、実体をこの世界から消しているのだがな」

「へー。……ん？　それじゃあ、なんで守りにいかないんだ？」
自分で守ろうとすると言っておきながら、レオンはここに残ると言った。それはおかしいだろうとオレは思った。

レオンはオレの問いに、
「それはもちろん、行くべきなのだろうが……」
と、そこで皮肉気に鼻を鳴らしてレオンはオレをみつめた。

「どこぞの生意気な小僧に言われたのだ。お主を頼む、とな」

「だから残る」と言った。オレは不審げにレオンを眺めたが、問い詰めても話してくれそうにはなかった。

……なんだ、どこぞの生意気な小僧って？

「ふーん、まあいいけど。じゃあ、日向君はどうする？」
レオンの話が終わったとみて、黒塚は楓を見て言った。楓は一度オレを見て、
「……私も残ります。雷牙が心配なので」
「そう言うと思ったよ」
ため息まじりに黒塚が言った。

「なんだよ、心配って。ガキじゃあるまいし」
「今はガキでしょう」
オレは楓を非難の目で見るが、楓は引く気はないらしい。こうなると楓は頑固だ。
それを知っているオレは、早々に諦めて「……勝手にしろ」とそっぽを向いた。

「……さて、とりあえずはじめようか」
一度咳払いをして、黒塚がオレを見つめてきた。

「まず君には、魔力の波動を感じてもらいたい」

そう言って黒塚は目を閉じ、一度小さく息を吐いた。
そして今までにない、無表情のまま目を見開き――

「……っ！？」

瞬間、オレは一瞬呼吸が止まった。
まるで得体のしれない何かが、体を貫いていったような錯覚を覚えた。

「……どうだった？」
すぐに破顔して、今まで通りのにこやかな表情に戻った黒塚が、逆に表情の硬くなったオレを見つめて言った。
オレは額に冷や汗を浮かべ、顔を青くしながら、ゆっくりと貫かれたかのような感覚を覚えた胸のあたりに手を当てた。

「な、な……んだよ、今の」

「今のが、魔力の波動さ。ちょっと強めだったけどね」
にや、と皮肉気に黒塚は口元を緩めた。
「これでなんとなく分かったでしょ。魔力の波動と……魔力の大きさの脅威が」

「……ああ、そうだな」
オレは少し前傾になりながらも、黒塚をにらみつけた。いきなりなにしやがる、とは思ったが、くやしいことに黒塚の言いたいことがはっきりと分かってしまった。

多すぎる魔力は人体に悪影響、ね。……こういうことか。

「雷牙、大丈夫？　会長！　私の時には最初にこんなことは……」
オレの肩に手をかけながら、楓が会長にもの申した。
しかし会長は気にせず、少し真面目な顔をしてオレを見下ろす。

「言っておくけど、今のは強めといってもたいした大きさではなかったからね。魔封具外したそのブレスレットのほうが、何倍も強い。君には、まずそれを知ってもらいたかったんだ」

何倍も強い、というところでオレは息を飲む。オレの体が消飛ぶかもしれなかった、そう言われいても半信半疑だったが、今のでたいした強さではないと言われたら、疑う余地がなくなってしまった。

「ま、そんなに神経張らなくてもいいよ。さっきのは軽い警告。お遊びみたいなもんさ。今からは、順を追って少しずつ制御に慣れていってもらうから」

そうにこやかに黒塚は言うが、オレはすぐには衝撃から立ち直れなかった。

１２（後書き）

計り知れないキャラですね、黒塚は。
次回はちょっとした出来事がありそうです。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

13

魔力制御の訓練を始めて三日目。

未だにオレは、一度も男の姿に戻れていなかった。

多少なりとも、魔力の制御が何たるかが分かってきて、黒塚にも「意外と魔力の才能あったのかもねー」と言われ、意外は余計だと思ったり思わなかったりしているのだが。

それでも、男に戻るのだけはどうしてもできていなかった。

まじショック。

黒塚が言うには、どうやら魔封具が、思いの外魔力を阻害しすぎて、男に戻るだけの魔力をうまく捻出できていないらしい。楓や他の生徒会役員のように、一部分だけ魔力の影響で変化するのと違って、オレは言わば全身が変化の対象になっているのだ。その分オレの場合は、変化するだけでもそれなりな魔力がいるとかなんとか。

そういうことらしい。

解決策は、オレがもっと魔力の制御を正確にし、扱える魔力の大きさを増やしていくのが、安全かつ確実のようだ。

そんなこんなで、

オレは近頃、かなりブルーだった……。

†††††

「あー、もうやだ……」

平日の昼下がり、オレは街をぶらぶらしていた。

「元に戻りたい……」

虹色に輝く金髪という、普通ではまずお目にかかれない特殊な髪をしているので、フード付きの服に帽子をかぶって目立たないようにしている。これはこれで目立つが、仕方あるまい。

「早く放課後になれよ」

誰に言うでもなく、オレはそう愚痴った。

この三日間、この格好では学校に行けないオレは、放課後まで自宅待機か生徒会室に待機という日々を送っていた。放課後になれば、黒塚や楓たちが、魔力制御の訓練に協力してくれるからだ。

逆に言えば、オレは放課後までなにもすることがなかった。一人で訓練できるほど、オレはまだ魔法が使えないから、自主特訓というのも出来ない。

しかもこの格好では、あまりおおっぴらに動けない。見た目小学生だ。昼間から大通りをぶらぶらしているところを見られたら、面倒なことに巻き込まれる可能性がある。

故にオレは、さっきから愚痴をこぼしつつ、屋内から飛び出しつつも、古宮高校のまわりでおとなしくぶらぶらしていたのだった。

「……ん？」

ふと、グラウンドの騒がしい音を聞きつけたオレは、ちらと端のほうからグラウンドを覗き見た。どうやら体育で陸上競技の測定をしているらしい。時間的には、昼食直前の授業であろうか。

……ちらほらと見知った顔が見えるところからすると――、

「……オレらのクラスがやってんのか」

女子の姿が見えないが、おおかた体育館でなにかやっているのだろう。

オレははぁ、とため息をついた。

「サッカーとかそういう試合形式なものなら見てもいいんだが、これじゃあなぁ……」

あまり学校に行っていなかったせいで、いまいち一人ひとりの顔が分からないので盛り上がらない。さて、どうしたものかとオレはあたりを見回したところで、ふと気が付いた。

「……なんだ、あいつ？」

目がいったのは体育館、さらに言うとその裏側。なにやら奇妙な人影があった。遠いので詳しくは分からないが、どうやら体育館に用があるらしい。

こそこそしているところを見ると、どう見てもまともな用には見え

ない。
オレはグラウンドからも人影からも見えないように身をかがめつつ、様子を見る。
「……よく見えないな。もう少し近づくか……？」
「声でもかけてみるのかい？」
「そんなことしねえよ、ただ様子見を――」
と、そこでオレは、ばっと振り返った。
「まあ確かにここからは見えにくいねー」
「お、おまえっ！？」
オレは背後を見て驚愕した。
「お前とは失礼だなー。せめて『会長』と呼んでくれないかな？」
そこには、ふふん、と鼻を得意げに鳴らしていつの間にか黒塚が立っていた。
「なんなら『鎌おにいちゃん！』とかでも十分――」
「死んでも言わねえよっ。てか、いつの間に……あと、なんで？」
「ふふふ、禁則事項さ」
口元に人差し指をあてがって、黒塚は言った。オレは冷たい目で黒塚をにらんだ後、さっさと体育館裏の人影に視線を移した。
「……ま、僕がここに来たのはまさしくあれのことさ」
「……あの人影？」
オレが尋ねると、黒塚は頷いた。

「君はまだ分からないかもしれないけど、僕には分かるからね。
あの人影は魔法使いだ」

「なに、まじでか！？」
オレは横に移動してきた黒塚を、まじまじと見つめた。

「うん、間違いないね。さすがに何がしたいのか分からないから、こうして目立たないところに来たわけだけど」
人影から視線を外さずに淡々と黒塚はしゃべる。オレも改めて人影を眺め始めた。

「……うーん」

と、不意に黒塚が呻き始めた。

「……ん？」
「ああいや。今体育館は一年が使ってるんだよね」
「ああ。オレのクラスだ」
「……ということは、日向君もあの中だね？」
「そう、なるな。……それがどうした？」

「いやね」と、黒塚は少し真面目な表情をした。

「……もしかしたら、日向君が危ないかもしれないなと思って」

「！？　どういうことだ？」
楓が危ないと聞いて、オレは少し声を荒げる。それに黒塚はちらとオレを見て、
「……レオンから言われたかもしれないけど。僕たち魔法使いは、封印が不十分だった魔界の扉から洩れてきた魔物や、あまり友好的でない異世界の住人と戦うために魔法や武器を使ってる。そうしないと、世界が乱れちゃうからね。僕たちはそのために魔法とかを使ってるけど、魔法使いの中には私利私欲のために魔法を使うやつも少なくない」
「そう、例えば……」と黒塚は人影に視線を戻しながら、
「人殺しの道具にしたりとか、ね」
「！？　それじゃあ、あいつ……」
オレが今にも走り出そうとしたところで、黒塚がオレの肩をつかんだ。
「放せっ」
「まあ、待ちなよ。まだあの人影がそうと決まったわけじゃない。動くのはかえって相手を刺激して、危険かもしれない」
「んじゃ、どうしろって言うんだよ！」
オレは黒塚の腕を振り払いながら怒鳴った。しかし黒塚は冷静な口調で、
「ここは様子を見るんだ。もしあの人影がそのような愉快犯だったとしても、こんな真っ昼間、しかも大勢に見つかるようなところじゃ、動くに動けないはずだ。事を荒立てれば、それほど自分も苦し

くなるからね」
「だから落ち着くんだ」と黒塚は言った。オレは舌打ちをしつつ、落ち着くために一度目をつぶった。

「……あ」

不意に黒塚が声を出した。それに慌ててオレは反応する。
「どうした！？」

「……どうやら、逃げられたようだね」
「なにっ」
オレは、ばっと人影がいた方に視線を移した。だが、そこには先ほどまでの人影は見当たらなかった。

オレは黒塚を見る。
「気づかれたのか？」
「……かも、しれない」
黒塚はそう言ってやれやれと首を振った。

「とにかく、今は大丈夫だったみたいだ。……でも、おそらく近いうち、あれはまた来るかもしれない」
黒塚は言いつつ、かがめていた体を立てた。

「宝条君。日向君のこと、しっかり見ていてくれないか」
「あ、ああ分かった」
オレはこく、と頷いた。楓のこととなったら、なにもしないわけにはいくまい。

「あ、でも、日向君には悟られないようにね。変に心配させたくはないでしょ？」

「もちろんだ。……了解、黙っとく」
「おーけー。それじゃ、僕は戻るよ。またお昼にね。昼には、一度生徒会室に集まって昼食にしよう。そのときは僕と君で警戒して、そのあと放課後までは、僕が何とか気を張っておくよ。宝条君も、あまり出歩かないようにね」
そう言って黒塚はひらひらと手を振った後、グラウンドに沿うように歩き、手近な校舎の陰に隠れていった。

「……」

オレは自分の手のひらを見つめた。男の頃と比べると、あまりに小さく、きゃしゃな印象を受ける手のひら。

「……っ」

ぐっと体の力を入れる。すると、その手のひらから、小さくぱちっと音がした。静電気をもっとささやかにした、電気が発生したのだ。言うまでもなく、オレが自分の魔力で発生させたのである。

しかし、それだけでオレの息は少し荒くなる。うまく魔力を制御出来ていない証拠だった。
「こんなんじゃ、ホント見るだけで、守ることはできねえな……」
ひとり呟いて、オレはぐっと拳を握った。

「早いうちに、何としても制御がうまくなってやる……っ」

あの人影が必ずしも愉快犯で、楓を襲ってくるとは限らない。しかしオレは、なにか火がついたような気がした。

13（後書き）

ようやっと話が動いてきたような気がします。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

14

人影を目撃してその翌日。オレはなんとか電撃を飛ばせるほどには、魔力の制御に成功していた。しかし相変わらず魔力の扱う量は大して増えず、全属性使えるということなのだが、雷だけしか使えない現状であった。

「でも、もう少しで元の姿に戻れるんじゃない？」

そう言ったのは、横に並んで歩いている楓だった。

今は放課後訓練が終わり、帰宅をしている最中だ。

「んー、だといいんだがな……」

昨日何もなかったとはいえ、今日何もないとは限らない。オレはあたりを警戒しながらそう言った。

その様子に楓が不審げにオレを見る。

「……昨日も言ったけど、なにか気になることでもあるの？　さっきからきょろきょろと」

「……え、あ。……別に、昨日も言っただろ。この格好は周りの目が気になるって」

周りの目が気になる。この言い訳は黒塚のアイデアで、昨日から使っている。理由はもちろん、楓に無駄な心配をさせないためだ。

「えー、でももう四日目じゃない。もう慣れたでしょ？」

「ば、ばか言え！　慣れるもんか。背格好が変わったから、視点が

違って戸惑うことあるし……し、しかも女の体だぞ！　と、トイレとか風呂、とか……まだ慣れねえよ」
オレは楓のほうを向いて力説した。最初は勢いが良かったが、最後のほうは赤くなるのが自分でも分かったし、口調も尻すぼみに弱くなった。

その様子に、楓は目を細めた。
「……あー、赤くなるって。なにかいやらしいこと考えたりしてるんじゃないの？」
「し、してねえっての！！」
「あはは、冗談よ。雷牙は女の子の体に慣れないだけだよね。……そっちの趣味があるわけではなくて」
「あ、当たり前だっ」
最後の言葉は、にこやかなのに戦慄を覚えた。それほど楓の威圧感がすごかった。

「ま、私も雷牙には早く戻ってほしいかなー。フルミナちゃんのときも可愛くていいんだけど。やっぱり雷牙は雷牙で、男の子だから」
そう言って楓は微笑みながらオレを見下ろしてきた。オレはちらとその顔を見たが、すぐに顔をそむけた。

「オレだって、戻れるものなら戻りたいさ。でも、魔力の扱える量がどうしてもうまく増えないんだよ」
黒塚が言うには、魔法を使えば使うほど体が魔法に慣れていって、潜在的に潜んでいる魔力を使える量が増えていく、ということらしい。
しかし、毎日のように使っているはずなのに、オレの魔力の使用量はあまり伸びていなかった。
どうやらオレは『魔法の扱いは器用』らしいのだが、『魔法使い的

には微妙』らしい。魔力への慣れが遅いのだ。なにか潜在する魔力を引き出すきっかけがあれば、一気に扱える量が増えるということらしいのだが……。

「……そう、せめてなにかきっかけがあれば――」

つぶやいた、そのときだった。

ゾクっ

いきなり背後から、とてつもないほどの悪寒……魔力波を感じた。
それは楓も同じだったらしい。
オレたちはすぐに振り返った。

「だ、誰だてめえ……」

振り返ると、オレたちの数歩後ろに、、黒いコートに怪しげな仮面をつけたやつが立っていた。
体格からして男であろうか。オレは一歩前に出て、楓を背にかばう。
すると楓が、
「……っ、雷牙！　あんたはまだ――」

「誰だ、って聞いてんだよ！」

オレは楓の言葉を無視して、男に怒鳴る。楓は何か言いたそうな様子だったが、すぐに表情を硬くしてオレの後ろで男をにらみつけた。

「……くくく」
おそらくなにかで声を変えているのだろう、耳障りな声で男が笑った。

オレは少し腰を落として、臨戦態勢になる。
「なにがおかしい！」
すると男はゆらゆらと頭を動かした。まるで亡霊のようだ。

「……俺の、正体……？　くくく……分かっているくせに」
「……なんだと？」
「見てたじゃないか……昨日、グラウンドの端から」
「っ！？　やっぱりてめえ、昨日のっ！！」
そう言ってオレは、男の目の良さ、勘の良さに驚いた。

こいつ……あの距離からオレのことに気づいていたのかよ。

あのとき、オレはやつを『人影』と言った。そうとしか見えなかったからだ。性別も、もちろん顔さえも、さっぱり見えなかった。

なのにこいつは、あの距離からオレのことが見えたというのだ。オレが見ていた、というのを知っていたから……。

「……なにしにきやがった」
オレはさらに警戒を強めて、男に尋ねた。すると男はオレのほうを向いて、
「……ガキには用はない」
「……んだとっ」

オレはカチンと来て、一歩足を踏み出した。

その瞬間――

ドフッ！！

「っ！？」

そう鈍い音がしたと思ったら、オレはいつの間にか近くの民家の石塀にたたきつけられていた。

「っがはぁ！？」

「雷牙ぁっ！？」

楓が叫ぶ。オレは、ばたと地面に倒れ伏しながら、混乱していた。

い、一体なにが起こった……？　どうしてオレは吹き飛ばされたんだ……っ！？

「あ、あんた雷牙になにを――」

オレが倒れ伏したのを見て、楓が髪を淡い亜麻色に変化せさながら男に向き直ろうとした。

だが……

「用があるのは、お前のほうだ」

いつの間にか、男は楓のすぐ前に立っていた。

「っ！？」

驚きつつも楓はすぐに距離を取ろうとバックステップしようとした。

だが、その前にがっしりと男に頭をつかまれた。
「っあ――」
楓は一瞬抵抗する素振りを見せたが、なにか魔法を受けたのか、急に体から力が抜け眠るように男のほうに倒れ掛かった。
「……くくく」
意識を失った楓を支えながら、男は小さく笑った。
「か、楓ぇっ！？」
オレは地面に倒れ伏しながら、必死に楓の名前を呼ぶ。しかし楓はまったく反応しない。
「て、てめえ……楓に、なにを……っ」
オレは石塀に寄り掛かるようにゆっくりと立ち上がる。体のあちこちが悲鳴を上げていた。
「……ガキには用がないと、言っただろう」
「う……るせぇっ！！　楓を離せ！！」
怒鳴るオレを、男は仮面越しに見つめてくる。
「……くくく、そうだ……」
男はそうつぶやくと、ゆっくりとオレのほうに、片手の手のひらを合わせてきた。
「……今夜、零時。昨日、俺がいたところで、待ってやる。それまで、この女は生かしておいてやろう。取り返したくば、武器でも何でも持って、やってくるがいい」
「な……んだとっ――」
オレが言い終わる前に、男の手のひらから生み出された真っ黒な魔

力の球が、オレの腹に突き刺さった。
オレはうめき声をあげる間もなく、少なくない血を吐いて再度地面に倒れ伏した。

「くくく……待っているぞ」
「……ま……て…っ」

楓を抱えて立ち去ろうとする男の背後に、オレは必死に止めの声をかけるが、かすれてうまく声が出ない。そのうちゆっくりと視界が暗くなっていき、最後には男が消えるのを見ないまま、オレは意識を手放してしまった。

１４（後書き）

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

15

夢を見た。

あれはまだ、オレの両親が家にいるころのことだ。

はっきりいって、オレは両親が嫌いだったし、向こうもオレのことは嫌っていたようだった。

だからオレがいる家には帰ってこなかったことがしょっちゅうあったし、オレもそれでよかった。

そんなある日、オレはとなりの日向家と海に行くことになった。

オレと楓は、子供らしくめいっぱい遊んだ。

だが、事件は起きた。

オレが連れて行った岸壁から、楓が海へ落ちたのだ。

オレは慌てて別のところから海に飛び込んだ。

しかしそこは相当深く、大して泳ぎの得意でないオレは、楓を助ける前に溺れかけた。

幸い、近くにいた大人にオレたちは助けてもらったのだが、その日一日オレは落ち込んだ。逆に落ちた楓に励まされたくらいだった。

そこで、オレは思った。

もっと強くなりたい。自分が失敗しても、楓を守れるくらいに。

楓によそよそしくなったのは、そのころからであろうか。

結局、今まで楓を守るどころか、傷つけてばっかりだった気がする。

今だってそうだ。

楓を守ろうとして、結局楓は連れ去られてしまった。

これじゃあ、昔と変わらない。

それじゃいけないだろう、宝条雷牙。

どうすればいい？

どうするのがいい？

決まってる。

助けに行けばいいのだ。

連れ去られたと言っても、男の言葉を信じるなら、楓はまだ生きているはず。

一度目は海で守れなかった。
二度目は連れ去られるのを黙って見ておくことしかできなかった。
三度目は、これからだ。
三度目の正直だ。二度あることは三度ある、なんて言わせない。
今度こそは、守ってやる。

†††††

オレはゆっくりと目を開けた。見慣れぬ天井が目に留まる。
「……ここは？」
オレは寝たまま首を動かしてあたりを探った。
どうやらオレは、タイル張りの床に寝かされているらしい。だが、直ではない。
誰かが敷いたのか、あるいはもともと敷いてあったのかどうかは知らないが、タイル張りの床の一角には柔らかな毛布が敷かれていた。
その上に、オレは寝かされているようだ。
だが、ひどく場違いなところに寝ているのは間違いないだろう。明かりが煌々とついているおかげで、部屋の中を一部分だが確認する

ことができた。

すぐ近くには長椅子の足が見て取れ、その奥にはどこか見たことのあるような、金属製のロッカー……。

「……まさかここ、生徒会室か……？」

オレはさらに確認しようと、寝ている身体を起こしにかかった。

「……っつ」

すると体のそこかしこから、鈍い痛みが走った。オレは痛みに眉をひそめつつ、皮肉気につぶやいた。

「……ったく、似たような体験を、つい最近もしただろうが。懲りねえな、オレも」

だが、今回は全く動けないというわけではないようだ。痛みは走るが、オレは何とか立ち上がる。

「でも、一体なんでこんなとこに寝かされてるんだ……？」

きちんと敷かれた毛布を眺めながら、オレは首をかしげた。

少し考えてみる。

……オレはあの男に手痛くやられて、そのまま気を失ったんだよな。普通だったら、誰かに見つけられたら病院に連れていかれてるはず。……しかし、今はわざわざ生徒会室だ。

まさか、あいつがオレをここまで運んだのか……？　病院じゃ、最悪抜けれないかもしれない。だからあの男が、オレがまっすぐに来れるように、ここに寝かせつけたのか？　だがしかし何故生徒会室なのか？　いや、そもそも本当にあの男がオレを運んだのか――

「……いや、関係ないな」

オレは言いつつ首を振った。

重要なのは、ここが奴の指定場所の目と鼻の先だということだ。

「……上等だ」

オレは時計を探した。幸いにもすぐ近くの壁に掛け時計があった。その時計は、あと三十分たらずで指定の時間になることを示していた。

「かなり意識がなかったみたいだな……」

オレは、長々と眠っていたのに指定の時間前に起きることができたことに、軽く安堵した。

『今夜、零時。昨日、俺がいたところで、待ってやる。それまで、この女を生かしておいてやろう。取り返したくば、武器でも何でも持って、やってくるがいい』

不意にあの男の言葉がよみがえった。

「……武器、か」

そうつぶやいて、オレはあのロッカーに視線を移した。

†††††

今日は満月だった。
月明かりが思いのほか強く、グラウンドは真っ暗ではなく、どこか神秘的な輝きをしていた。
ザッ、と砂を踏みつける音が無音の空間に響いた。
「……時間通り。律儀だな」
「……まあ、な」
暗がりの中、男の仮面が月明かりを浴びて鈍く光る。
「……約束通り、女は生かしておいたぞ？」
「当たり前だ」
オレの金髪も、月明かりを浴びて虹色に煌めく。
オレと男は、十メートルほどの距離で対峙した。男から横に視線を移すと、体育館の外壁に寄り掛かるように、楓が座って目をつぶっているのが見て取れた。
「言いつけどおり、楓を取り返しに来たぜ」
オレは楓から男に視線を移した。男はくくく、と笑う。

「……取り返しに来た、ね。……無様にやられに来た、じゃないのか？」
「そんなもん、やってみなくちゃ分かんねえだろ？」
「くくく……一度ひどくやられたというのに、懲りないやつだ」
そう言って男は、仮面越しにオレの顔から少し視線を下げた。

「それは、自信の表れか？」

それにオレは肩をすくめる。
「ふん、武器でも何でも持ってこいって言ったのは、お前だろう？」
オレは言いつつ、今まで抱えていたものを抜き放った。

「言われた通り、持ってきてやったぜ」

オレがこの場に持ってきたのは、生徒会室のロッカーに入っていたあの大剣だった。初めて刀身を拝んだが、素人のオレでも名剣なのだろうとなんとなく分かった。

オレがその剣をひどく重そうに構えているのを見て、男はくくく、と笑った。
「……えらく不釣り合いな武器だな。ちゃんと、扱えるのか？」
「当たり前だろ……っとと」
オレは少しバランスを崩し、ふらふらと左右に動く。男がそれに小さく笑ったので、オレはむっと、顔を赤くしてだらんと剣先を下げた。

そうしてゆっくりと、剣先を自分の右のわきにずらす。

「……さあ、来いよ！」

オレはぐっと両手に力を込める。男はそれに肩をすくめたが、

「……まあ、いいだろうっ」

と、一気にオレのほうまで駆けてきた。

「っでぇりゃっ！！」

男が間合いに入ったと思ったオレは、一歩前に出て体ごと大剣を横に薙いだ。ブオンッ、と重苦しい風切り音とともに、きれいな銀色の軌跡が暗闇に現れる。

しかし直前の姿勢から、オレが大剣を横に薙ぐしか攻撃方法がないということを、男は分かっていたのだろう。冷静に大剣が振られる直前にバックステップをして、大剣から逃れた。

だが、オレもそれは分かっていた。

「まだまだっ、食らえ！」

大剣の遠心力で一回転して元の向きまで戻ったオレは、左手を男に向けて、それまでに唱えていた電撃の初歩魔法を放った。

電撃は薄紫の軌跡を残しながら、一気に男のもとに走った。

「……っ」

男は予想外の反応だったのか、若干うめき声を漏らす。そのまま、土煙の中に男は消えていった。

「やったか！？」

オレはぐっと拳を握った。

だが、すぐに違和感を覚える。

……土煙が、多すぎないか？

オレはじっと土煙の先を眺めた。

すると――

「くくく……さっきのは、驚いた」

「っ！？　ぐはぁっ」

男の声が背後からしたと思ったら、背中に強い衝撃を覚えた。たまらずオレは、片膝を地面につけた。
「い、いつの間に……っ」
呻きながら、オレは背後を振り返った。

「……土煙の多さに勘付いたようだが、まだまだ、甘かったな」

そこには、全くの無傷で男が悠然と立っていた。
「くっそ！？」
オレは続けざまに電撃を放つが、男はことごとく避けた。
「……お前、先ほどから、つまらない電撃ばかり。まさか、手を抜いているのか？」
何度目か電撃を避けたところで、男は冷めた口調で言ってきた。
「な……んだとっ」
そのころオレは魔力の使い過ぎか、かなり息が上がっていた。
「雷属性の特性を、まるで分っていない」
淡々と言いつつ、男は一気に距離を詰めてきた。オレはその動きに反応できなかった。男はそのまま、膝をついているオレの腹を、遠慮なく蹴り飛ばした。
「あ、がはっ！？」
男の蹴りは想像以上に重く、小さな体はころころと砂の上を転がっ

た。

「くくく……手土産だ。少しレクチャー、してやろう」

「うぐっ」

男は面白そうに、オレを踏みつけて言った。

「雷属性は、確かに電撃を飛ばしたり、遠距離にも適している。威力も、あるからな。だが、お前のような前で戦うやつには、もっといい使い方がある」

それは、身体能力の向上。

「身体能力の、こう、じょう……？」

「基本的には、どの属性にも、その使い方はある。俺は闇を使うが、身体能力を上げているおかげで、さっきの電撃も避けていたようなものだ」

男はおもむろにオレから足をどけた。そのまますたすたと、オレから離れる。

「雷属性の特徴は、その身体能力の向上性能が、ほかの属性より抜きんでて、高いことだ。特に、速さに関しては、機動力重視の風属性よりも、直線距離を走らせたら、速い。柔軟な旋回は、風属性に劣るが、まさに『光速』と言える速さだ」

歩いていた男は不意に立ち止まった。よく見ると、すぐわきにオレが手放した大剣が落ちていた。

「……かの有名な英雄、フルミナ・レーゲンも、その光速を、自在

に操っていたらしいぞ」

ゆっくりとした動作でその大剣をつかんだ男は、二、三回大剣を振った後、その細い肩に窮屈そうに担いだ。

「……重いな。……さすが……だね」

と、そこでぽつりと男がなにか地声でしゃべったが、オレのところまでははっきりとは届かなかった。

「……さて、ここで質問だ。何故、俺はこんなことを、話したと思う」

再び男は歩き始めた。さらにオレからは遠ざかる。

「答えは、お前があまりに弱く、つまらないから、だ」

「……っ、てめ……え！？」

オレは男が向かっているところに見当がついて、思わず呻いた。

男は、眠っている楓のすぐ目の前に立った。

「……お前は、この女を大事そうに、守ってたな」

くくく、と男が笑う。

「この女の腕でも斬れば、お前も本気を出すか……？」

「っ！？　貴……様ぁっ」
オレは体に力を入れるが、帰ってきたのは激しい痛みだけで、ちっとも体は起き上がらない。
「おお、元気になったな……じゃあ、実際に斬ったら、どうなるかな？」

「っ、がああああぁぁぁぁぁっ！！」

オレは叫んだ。だが、両手を突っ張るだけで精一杯であった。
「くくく、仕方ない。十秒、待ってやる。それまでにここまで来て、女を助けてみろ」
「十……九……」と男が数え始めた。オレは必死に立とうとするが、どうしても足が言うことを聞かない。
くっそ！　動けよオレの足！！
その間も、着々と男は数える。

「っ、動けっつってんだろぉぉぉっ！！」

悔しさのあまり、オレはドカンと拳を地面に叩きつける。
と――、

『焦らないで』

声が聞こえた。

『落ち着いて。君なら、出来るから』

不意にブレスレットに違和感を覚える。

『私の認めた、君なら……』

ブレスレットから、魔力が流れてくる。

『最後まで、私のことを助けようとしてくれた、あなたなら――』

バチンッ、とすぐ近くで電気が弾けた。

１５（後書き）

戦闘シーンは本当に描写が難しいです。少しでも臨場感が出ていたらいいなぁ……。

次回は、主人公の本領発揮です！　……といっても想像しやすいですがね。

そしてストックと展開の都合上、短くなるかもです。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

１０／５　少し文章を編集しました。

16

「……くくく、時間だ」

男は急に動かなくなった雷牙から目を離し、肩に担いだ大剣を握りなおして、楓のほうを向いた。

「……いくぞ」

そう言って男は大きく大剣を振りかぶった。

そして、

「……っせいやっ！」

振り下ろした。

だが――

ザクッ

振り下ろされた大剣は、楓をとらえることができず、地面を深く削った。

「……さすがに、速いな」

男の目の前から、楓は消えていたのだ。

楓は――

「……おせぇよ、てめえ」

遥かに離れたところで、

雷牙に抱えられていた。

†††††

不思議な感覚だった。

頭の中に声が響いたと思ったら、ブレスレットから魔力が流れ出した。

その直後には動き出していて、次の瞬間には楓を助け出して、男から離れていたのだ。

ありえない速さだった。

下手をすれば、オレの金髪と相まって光の軌跡に見えたかもしれない。

だが、

そのなかでオレは鮮明に感知することができた。

風を切る音や流れる風景を、この耳でしっかり聞き、この目でしっかりととらえることができた。

オレはなんとなく、悟った。

オレはこの瞬間、『光速の世界』の住人になったのだ、と。

「くくく……ようやっと本気を出したか」
「ああ、遅くなって悪かったな」
オレはゆっくりと、楓を近くの壁に寄り掛からせた後、男のほうを向いた。男を軽くひと睨みする。
小さく詠唱。

「……っ」
そして男の顔めがけて電撃を放った。
「……なんの、つもりだ……っ！？」
男は首を動かしただけで雷撃を避けた。

しかし、息を飲む。

いつの間にか手に持った大剣が消え失せていたのだ。
ついでにオレもいない。
それはそうだ。

だって――

「これを取り返したかっただけだ」

オレは、大剣片手に男の背後に回っていたからだ。

「……この短時間で習得したか。器用だな」
「器用が取り柄らしいからな」
軽口を言いつつ、オレは両手に大剣を持ち、最初と同じ体勢になった。

「……はぁっ！！」
オレは気合の声とともに一歩踏み出す。
そして、
一瞬で姿が霞んだ。
「……む」
と思ったら、男の黒いコートの腕の部分がスッパリと切れて、男の腕があらわになっていた。
「……うまく避けるもんだな」
オレはその一瞬で、楓のいる位置まで移動していた。
「……でも次は、外さねえっ」
オレは再び大剣を構える。
その時バチバチ、とオレの周りで電気が弾けた。
男はその様子を見て、ひどく落ち着いた様子で、片手を顎に当てながら言った。
「……さしずめ、虹色の電撃姫、というところか？」
それにオレは、むっと眉を寄せる。
「姫じゃねえ、オレは男だっ」
この男に言っても意味はないのだろうが、オレは力説した。

男はオレの様子に、男はしばしオレのほうを、まじまじと見つめた。
そして――

「っはははは！　あーはははは！」

盛大に笑い始めた。

「な、えあ……え？」
オレは突然の男の豹変ぶりに、かなり戸惑う。
「え、なんだよ一体……」

「ったく、馬鹿なことをするからだ」

と、不意に後ろから新たな声が聞こえた。
「っ！？」
慌ててオレは、その声の主を確認すべく振り返った。

そして、

驚愕。

「まったく、悪趣味な呼ばれを受けたと思ったら、どういうつもりだこれは？」

「お前、氷室勠也っ！？」

オレは声の主を指さしながら、大声を出した。
なんと、オレの後ろに立っていたのは、病院で会ってそれっきりであった、氷室勠也であった。

「ん？　なんで俺の名前を知ってるんだ？」
勠也はオレを見下ろしつつ不審げに言った。
「なんでって、それは――」
とそこでオレは、ふと気が付く。

あ、そうか。こいつは知らないんだ。オレが――

「そりゃ、知ってるよ。その子は先日、君に直々に名乗られた、宝条雷牙君だからね」
「えっ！？」
突然、男が声変えをやめ、地声で話し始めた。その声を聴き、オレは耳を疑う。

え……てか、その声その口調は……。

「……よく分からんが、とりあえず先にその悪趣味な仮面をとれ」
「はいはい、君ならそう言うと思った」
勠也が言うと、男は意気揚々と仮面を取り始めた。

……おいおいおい。仮面の怪しげな男って、まさか……。

「いやー、仮面って結構蒸れるね」

「か、会長っ！？」

驚くべきことに、仮面の下は、にこやかな顔をした会長こと黒塚鎌、その人であった。

16（後書き）

久しぶりな勠也の登場です。
そしてびっくり展開、のはず？

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

17

「な、え……はぁっ！？」
「あー、混乱してるね宝条君？」
「あ、当たり前だっ」
黒塚に言われるまでもなく、オレは混乱していた。
さっきの仮面男が、会長だった……！？
「え、じゃ、じゃあ待て。なにか？　さっきまでオレを蹴ったり踏んだり、楓に剣を向けたのも全部……」
「そ。全部僕なのでした」
「いやー、なかなか迫真の演技だったでしょ？」とうれしそうに語る黒塚。
それにオレは……、
「……て、てめえ！　よくもやってくれやがったなオイ！！」
電光石火のスピードで黒塚に殴りかかった。数十メートル離れていた距離が、一瞬にしてゼロになる。しかし黒塚は、驚くことにひらりとかわし、むんずとオレの細腕をつかんだ。
「ごめんごめん。でも、新しいことが出来るようになったじゃない」
「そういう問題じゃねえ！　放せっ、泣き言言うまで殴ってやる！！」
「うわーん、許してよー（泣）」
「だ・ま・れっ！！」

「……なんなんだ、一体」
うがー、と暴れるオレをにこやかにあおる黒塚。その様子を、実に微妙な目で見ていた勁也が口を挟んだ。
「あー、うん。説明するよ。たぶんもうすぐ……」
「うがーっ！　あ――」
不意にオレは、体から力が抜けるのを感じた。ガクッと膝が折れる。
「おおっと。……ね？」
「……趣味の悪い終わらせ方だな」
「な、なんだ……？」
オレは黒塚に支えられながら（ぎゃー！？　何かされそうという女の本能っぽいのが……っ）困惑の表情を浮かべる。
「あれだけ一気に魔力を使ったでしょ？　それの後遺症だね。今は体にまったく力が入らないはずだよ」
してやったり、みたいな口調で黒塚は言った。
「……くっそぅ……」
オレはふるふると震えながら、精一杯黒塚を押した。そうすると、オレの体は黒塚から離れ、代わりに背中から勁也のほうに倒れこんだ。勁也は少し驚いた様子で、オレの両肩を持った。
「お、お前に抱えられるくらいなら、こいつのほうが、ましだ」
熱病にかかったかのような気怠さのなか動いたせいで、頬が上気している。それでもオレは、へへ、と黒塚に皮肉気に笑って見せた。
「振られたな、鎌」

勠也も意地の悪そうににやけて加勢する。
それに黒塚は、
「……ぐっはぁっ！？」
血を吐かん勢いだった。
「……く、魔力の使い過ぎが原因で頬が上気しているのは、わかってるはずなのにっ」
苦しそうに胸と頭を抱える黒塚。

「……そんな顔でツンデレされたら、ときめいちゃうじゃないか！」
「もう黙ってろよお前！！」
だるいのをそっちのけでツッコミを入れてしまった。
「……気持ちはわかるが、お前も大人しくした方がいいぞ……」
反動でさらに力が抜けたオレに向かって、勠也が嘆息まじりに言った。
「……とりあえず、ここにいても埒があかない。鎌、一旦生徒会室に行くぞ。どうせ開いてるんだろう？　お前はそこの女子生徒を担いでやれ」
てきぱきと勠也が指示をかける。黒塚はいまだにぶつぶつ言いなが

ら、言われた通りに楓のほうに向かう。

「さぁて、ちょっと失礼しますよ、お姫様？」

「なに……って、うわ」

勠也はそう言うと、オレを抱えなおした。

「ちょ、おま、これ……っ」

「ん？　どうかされましたか、お姫様？」

抱えなおし、オレはいわゆるお姫様抱っこをされるはめになった。

突然のことと、初めてのことで、緊張してオレは腕を縮こませる。

「いやこれ、は、恥ずかしいだろ……？」

オレは勠也の顔を直視せず、そっぽを向きながらつぶやいた。

勠也は、ふっ、と鼻を鳴らした後、オレの耳元でささやいた。

「……ずいぶんと女らしくなったな、雷牙？」

「んなっ！？」

オレはささやかれたとき息のかかった耳を押さえて、勠也を見た。

そんなつもりはないのに自分の顔が赤くなるのが憎らしい。勠也はそんなオレにウインクをして、

「なにがあったのか、じっくり聞かせてもらうぜ？」

勠也らしい、自信に満ちた口調でそう言った。

†††††

その後、オレたちは勠也に今さっきの経緯についてと、オレがこの姿――フルミナ・レーゲンになったことについて、生徒会室で話すことになった。途中で楓も起きてきたので、楓もその話し合いに参加した。楓は、勠也がいることに非常に警戒したが、オレが説明すると、しぶしぶ口をつぐんだ。

説明は、最初はオレ視点のものから始まったが、それが終わったとみるや黒塚が補足を入れてきた。
驚いたことに今回の事件はあの人影騒動から、すべて黒塚の自作自演だったらしい。人影は黒塚の作った幻影。それを愉快犯とオレにほのめかして、ダシに楓を使い、あとはオレが魔力を爆発させるような状況に持っていくだけ……。

「なんでそんなはた迷惑なことしたんだよ？」

そうオレが聞くと黒塚は、

「言ったじゃない。君にはなにかきっかけが必要だって」

さも当然のようにそう返してきた。

「おかげで『光速』が使えるようになったでしょう？」
「だからってなぁ……っ！」
「あ、そうだ。宝条君、ちょっとブレスレットを見せてくれないかい？」
そう言って黒塚は遠慮なしにオレの左腕をつかんだ。オレは抵抗しかけたが、魔力の使い過ぎによるだるさがまだ残っていたので、仕方なく断念した。

黒塚はまじまじとブレスレットを眺めた後、一瞬にやっと怪しげな笑みを浮かべた後、何かを唱え出した。するとブレスレットが独りでに輝き始めた。
輝きは黒塚が唱えている間中続き、詠唱の終わりとともに、光を失っていった。

「はい。できた。これで今までよりは魔力の融通が利くようになったと思うよ」
「え、ああ……ん、ほんとだ」
確かに黒塚の言った通り、魔力の量が増えた気がする。
「へえー、分かるんだ。もうそれなりに制御は習得したんだね。そこまでくれば、基本的な制御訓練も不要かもね」
そう言って黒塚はオレから離れる。
しかしオレは聞きたいことがあった。

「おい、待ってくれよ。オレはまだ男に戻る方法分からないんだが……」
「ああ、そのこと？」
黒塚がよくぞ聞いてくれましたと言わんばかりに、得意げに言った。

「残念ながら、それはしばらく先になりそうなんだよねー」

「はぁ！？　なんで？」
オレはガタンと座っているイスを鳴らしながら、身を乗り出した。
「いやー、実は予想以上に君の変化は魔力がいるようでねー。確かに君の場合、変化という『なりきり』よりも、むしろそのものに『なっちゃった』感が強いんだよね。俗にいう転生の一種とも言い換えられるほどのね。戻るのは、魔封具つけてる段階では難しいとい

うか、無理というか……」
「まじかよ……」
「まじだよー」

がっくりと、オレは肩を落とした。
「な、何とかならないんですか、会長？」
楓がすがるように黒塚に言う。
だが、黒塚は首を振った。

「んー、正直言うと無理だね。力ずくでやろうとしても、宝条君の体が持たない。魔封具が取れるように強くなるまで、辛抱するしかないね」
「そう、ですか……」

がっくりと、楓も肩を落とした。
「……うれしそうな顔してるな、鎌？」
ぼそっと勠也がつぶやく。黒塚はそれに無言の笑顔（にやっ）で答えた。

くっそ、人の気も知らないでこの野郎は……っ

「……ところで、なんで俺までよばれたんだ？」
勠也が黒塚を責めるように言った。確か勠也は、黒塚に呼ばれたと言っていたが……。
「ん？　なんだい勠也君。君ともあろうものが。それは愚問じゃないのかい？」
「……そうだな。愚問だっかな」
黒塚が皮肉気に言うと、勠也はなんとなくその返答を予想していたのか、責めはせず嘆息交じりにそう言った。

「どうするつもりだ？」

「うん。具体的には、君をこの学校に転入させるつもりだよ」

「そこの……」と黒塚はおもむろにオレを指さして言った。

「フルミナ君と一緒にね」

17（後書き）

なんで勠也と黒塚は親しげなの？　というのは次回ちょろっと説明を入れたいと思います。ほんとちょろっとの予定で、詳しい話は追々どこかの段階でできたらいいなと思っていますが。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

18

「……と、言うわけで今日からこのクラスで一緒に学ぶことになった、氷室勠也君と、留学生のフルミナ・レーゲン君だ」

『よろしくお願いします……』

黒塚の騒動が解決した翌日。オレと勠也は、真新しい制服を着こなして、一年二組の教室の前に立っていた。

「（どうしてこうなったんだよ！？）」

「（知らん。生徒会に入るには、ここの生徒である必要があるんだとよ。文句は鎌のやつに言ってくれ）」

「（もう大いに文句は言ってきたよ！　でもなんか無駄に準備はいいし、口車に乗せられて引くに引けなく……て言うか、お前あいつと同期って聞いたぞ！　なんで一年なんだよ！）」

「（一年の時に一度ここを去ったからだ）」

「（じゃあ、前はここの生徒だったのかよ！　……の割には、先生は誰もお前のこと知ってなさそうだったぞ？）」

「（……どうせ鎌のやつがなにかしやがったんだろうさ）」

「あー、君たち。君たちの席はあっちだ。ほれ、行きなさい」

ひそひそと話し合うオレたちの背中を、担任がせっせと押した。オレたちはしぶしぶ後ろの方の席に座る。

「えー、もうひとつ連絡だ。今まで一緒に……といってもそれほどいなかったが、宝条雷牙君は、親戚の関係上海外に行くことになったそうだ」

「は、はぁっ！？」

オレは思わず大声を出して立ち上がった。すると、一気に視線が集まってきたので、「ぁ……」と小さく呻いて、真っ赤になって座った。

「あー、いいかね？　しかし、本人や親戚たっての希望で、一応この学校に籍は置いておいてほしいとのことだそうだ。だから宝条はしばらく休学状態になるということを知っておいてくれ」

「……なん、だって……？」

オレは今知った情報に驚愕した。

いや、宝条雷牙はここにいますよー！！　て感じだ。

「……鎌の野郎、また適当なことをしたな」

ぼそっと、オレの後ろの席から勁也が言った。

「……やはり犯人はあいつか」

オレは頬を怒りでぴくぴくさせる。

あの野郎……すぐにでも張り倒しにいってやろうか……っ！

「……そういえばお前、足は届いてるのか？」

不意に勁也が面白半分な様子で聞いてきた。

それにオレは小声だが、堂々と言った。

「……届いてないよ、悪いかっ！！」

はっきり言って、小学生以上には見えない背格好だ。高校生用のいすが合うわけがない。

「よくもまあ、そんなナリで入学できたもんだな」
「……自分のことだが、オレも不思議で仕方ないわ」
ため息交じりにオレはつぶやく。

合わない、といえば、この制服もそうだ。

黒塚からもらったこの古宮高校の女子用制服は、市販のサイズの一番小さいものよりさらに一回りほど小さい特注品らしい。それでもすがすがしいほどに袖は余っている。ハンガーに掛けて拝んだ時には、こんな小さいの入るかよとか思った過去の自分が羨ましい……。

「しかしまあ、やはりこういうことになったか」

オレが沈んだ顔で制服の袖を眺めていると、やれやれと言った感じに勠也が言った。

「……どういうことだ？」
「うすうす予感はしていたんだ。初めてお前を見た日からな。お前には魔法の素質があると気づいた時に、もしかしたら鎌のやつ、俺ごと生徒会に引き入れるんじゃないかってな。だからあの時病院で言っただろ？　またな、て」

そうか、あのときの『またな』はそのためのものだったのか……。

「……同期だけにしては、やたらあいつのこと分かってるみたいだな？」
オレが勠也の話ぶりに疑問を呈すると、「そりゃあな」と勠也は言った。

「あいつとは、昔からの付き合いだからな。腐れ縁ってやつか。ついでに言うと、瑞希のやつも俺のことは知ってるぜ」
「へえ、そうだったのか。道理で親しげだと思った」
「あいつはホント、底知れないやつだよ」
「……分かる気がする」
オレは苦笑いを浮かべながら同意する。

「ま、なんにせよ、だ」
と、勠也は拳をオレのほうへ突き出す。

「これからよろしくな、『フルミナ』？」

それにオレは、口元に笑みを浮かべながらその拳に自らの拳を合わせる。

「……いやだからオレは男だっての！」

18（後書き）

第一部完です。

ということなので、これの投稿と同時に章を付け足しました。

ここから先のストックはほぼありません。故に毎日更新とはいかないかもしれません。一週間以内には更新できるよう頑張りますので、ご容赦してください。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

序章

とある国のとある森。
町はずれにあるその森で、ある日世間を騒がす恐ろしい事件が起こった。

最初に目撃したのは、夜行性の動物を観察しようとして、深夜森に入った動物学者らの一行である。

その森は、貴重な動物が生息すると同時に、ここ数か月頻繁に新種が発見されている、学者たちの間では非常に注目されている森であった。しかし、野盗の温床としても知られていたところであったので、学者たちは腕に覚えのある護衛たちを連れていた。

その日はきれいな満月であった。
学者たちは、野盗の存在に緊張を隠しきれないでいたが、それに負けない好奇心を持っていた。

しかし、観察は思いの外はかどらなかった。新種どころか、本来見えるべきであろう個体にも出くわさない。動物たちが全くいなかったのだ。

学者たち一行は、なにかおかしいと思い始めた。

しかし高い研究費を払い、このような辺境の町まで来て、あげく護衛まで雇ってきたのだ。スケジュールの関係上、次の満月の日まで待つことはできない。チャンスは今日しかないのだ。さすがに手ぶらでは帰れない。

そこでふと、学者の中の一人が仮説を立てた。
もしかしたら満月の日限定の行動なのかもしれない。
そのように考えると、がぜん意欲がわいてきた。
絶対になにか発見してやる。
そう考え、学者たち一行は徐々に奥へと進んだ。
そこで、突然見たのだった。
おびただしいほどの死体たちを。

それはもう、まさに地獄のようだったという。
数十体にも及ぶ死体の中には、動物だけではなく、森を根城にしていたであろう野盗たちのものもあった。
一行は、事件性の強さに一度足を止めたが、風に誘われるように、さらに先へと進んだ。
そして一番奥の、不思議と木々が立っておらず、月明かりがまっすぐと入るその空間に『それ』はいた。

『それ』は、細身の少女であった。

しかし、一目でただの少女ではないことも分かった。

少女の足元には、先ほどとは比べ物にならないほどの死体が転がっていた。動物も、人間も関係なく殺されていた。少女も、元の服がどうだったか分からないくらいの返り血を浴びていた。

月を眺めていた少女は、一行が現れるとゆっくりと振り向いた。
少女の顔は、まだ幼かった。十五、六歳程度だろう。風に揺れる緑の髪が、彼女を森の精霊のように見せる。

だが可憐な見た目に反し、少女はひどく血に飢えた瞳をしていた。

護衛の一人が、危険を感じ手に持っていたライフルの銃口を少女のほうに向けた。
少女は呆けたようにその銃口を眺めていたが、

やがて、

笑った。

その後のことは、よく覚えていないという。数瞬後には、少女がいつの間にか持っていた小さな二丁拳銃に、学者の前で壁を作っていた護衛たちが、すべて殺されていたというのだ。

「っあはははははははははは！！」

狂ったように笑い出した少女。

学者たちはなりふり構わず逃げ出した。少女は笑いつつも、背を向ける学者たちを無遠慮に撃ち抜く。その死の嵐の中、たった一人、運よく町まで逃げることができた。

少女は町までは追ってこなかった。

生き延びたその学者は、顔面を蒼白にしながら言った。

『あれは、魔物だ』と――

序章（後書き）

第二部『ガンスリンガー』の序章です。

一発目からなんとまぁ……ひどい話です。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

01

キーンコーンカーンコーン

「……それじゃ、今回はここまでにするか。日直、号令を」

「……あ、オレだ。えーっと……きりーつ」

オレは可愛い声でそう言って、真っ先に立ち上がる。するとオレの声に続いてぞろぞろと他のクラスメイトも立ち上がった。そうなると、オレの姿は前から確認できなくなるらしい。

……小さいから。

「きょうつけー……れー」

『ありがとうございましたー』

その言葉が終わった途端、教室内は雑談につつまれる。

「……あー、号令慣れないわ」

本日四回目なのだが、オレはそう愚痴りつつどかっと座った。さっきまでずっと座っていたから、まだまだ温かい。

……そしてなんだか座り心地が悪かったので、オレは軽く腰を上げて、イスとの間にスカートを挟んでから座った。

「まあいいじゃねえか。お前の声は高くて響くからな」

「なりたくてなったわけじゃないって言ってるだろ？」

上から降ってきた言葉に、オレはすぐ後ろの席で立っている男を非難する眼で見上げた。

「そうだったな」
そう言いつつ、二枚目の顔に似合うシニカルな笑みをしたのは、氷室勠也であった。勠也はオレの後ろの席であり、近いので『素の口調』で会話ができた。

「さて、飯の時間だ。購買に行くか、雷牙？」
勠也も勠也で、周りが聞いていないと思ったら、オレのことをフルミナ・レーゲンではなく、男の時の本名、宝条雷牙で呼んでいた。

オレは頷き、すくっと立ち上がる。
「おーけー、了解。えーっと……か、楓―、『わたし』たちの席を取っておいてねー！」

「うん、わかったわ」
オレが少し離れたところにいる楓にそう言うと、楓は微笑みながら頷いて、いそいそと自分のバッグから弁当包みを取り出した。

オレは楓のその様子を見ながら、さてと勠也のほうに向きなおる。
その時に、光の加減で虹色に輝く髪と制服のスカートが、かわいらしく揺れた。

「慣れたもんだな」
オレの言動をなんとなく見ていた勠也が、一言つぶやいた。オレは複雑な顔で勠也を見上げる。
「……の、ように見えるか？」
「ああ」

その一言にオレは軽いショックを覚える。きっと『慣れたもんだな』の先には少し言葉が省略されているんだろうなと思ったからだ。

たぶんその言葉を補うと、このようになるのだろう。

『女の身振りに』慣れたもんだな。

……。

「ははは。大変だな、『フルミナ』？」

「う、うるさい。行くぞっ」

オレは赤くなりつつ、そっぽを向いて勠也の前でさっさと歩きだした。

勠也とオレが転入（男のオレは、知らないうちに海外へ渡ったらしく長期休学。もはやジョークの域だ）してから、一か月が経っていた。

その間に衣替えが始まり、半そでのカッターを着た生徒たちが見られるようになった。そしてまた、その一か月でオレたちは、それなりにクラスに馴染むようにもなっていた。

勠也は、もともとカリスマ性が高く、冗談も通じるやつのようだったので、すぐにクラスの頼れる兄貴みたいなポジションを確保した。同時に昔オレが俳優男と称したように顔もよいので、女子にはもはやモテモテであった。転入初日で告白してきた女子がいたくらいだ。断ったらしいけど。

一方オレは……

「あ、フルミナちゃんだ！　こんにちは～」
「きゃー、今日も可愛いわね！」
「ねね、私の妹にならない？」

ある意味、女子にモテていた。

「え、ああ……いや。あの、購買に……」
「きゃー、照れてる照れてるー。赤くなっちゃってかわいー！」
そう言って、二年生の女子三人組は、オレの頭をしこたま撫でる。

「じゃあね、フルミナちゃん！　それに、勠也様も！！」
オレを撫でることに満足したのか、三人組は颯爽と立ち去って行った。

「モテモテだな、雷牙」
皮肉気に勠也が言う。オレはじろ、と勠也を見上げた。

「……あれはただ単にオレで遊んでるだけだろっ」

そう、あれは断じてモテているわけではない。見た目小学生のオレを愛玩動物かなんかと間違えてるんだっ！　毎日毎日飽きもせず頭を撫でまわしやがって。それになんだよ、妹にならないかって……。

「……てか、お前こそなんだよ。『勠也様』て？」
オレは反撃のつもりで勠也を問い詰めた。

すると勠也は、お得意のシニカルな笑顔を浮かべた。
「ふふん、まあそうひがむな」
「ひがんでねーよ！」
この一か月で、オレの周りにはこんな風景が作られているのだった。

01（後書き）

序章とは　うってかわって　平和感

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

02

「やあ、一年生諸君」
「ようこそ」

放課後、オレと楓と勠也は三人で生徒会室に足を運んだ。生徒会室にはまだ三年生の二人と、レオンしかいなかった。
「あれ？　二年生の皆さんはどうされたんです？」
楓が黒塚に尋ねる。
「ああ、弥栄君と山城君は掃除。夏目君は、二人を待って友人とおしゃべりしてるみたいだよ」

「……いつも思うんだけど、なんでそんなタイムリーなことが分かるわけ？」
オレは疑わしげな目で黒塚を見る。黒塚はオレの視線を真っ向から受けながら、

「あっはっは、企業秘密さー」
平然と適当なことを言った。どこの企業だよ。

「ま、二年のみんなが来るまで会議は始めないから、適当にくつろいでてよ」
そう言って黒塚は手元の雑誌に目を落とした。なんとなく気になって、オレは遠くからその雑誌を覗き見た。

「……」
とたんにオレは顔をしかめた。

黒塚が読んでいたのは、コアなアニメ雑誌であった。

「？　一緒に見るかい？」
「けっこうです」
軽く雑誌を上げてこっちを見てきた黒塚に、遠慮なく白い目を向けた後、さっさと視線を外した。

「小娘」
さて何をしようかと、オレがきょろきょろとあたりを見回していると、レオンの奴が小娘――オレのことを呼んだ。

「……、なんだよ？」
オレは何となく嫌な予感を感じながらレオンのほうを向いた。
レオンはふん、と鼻を鳴らして、
「お主は訓練でもしておけ」

「あーあ、言うと思ったよ！」
予想通りの言葉が来て、オレはやけっぱちに怒鳴った。

こうして空き時間さえあれば、レオンがオレに魔法や戦闘の訓練を強要してくるというのは、ここ最近の傾向だった。

「だからなんでオレばっかりに言うんだよ！」
「ある男に頼まれたからだと言っておるであろう」
「ある男って誰だよ！？」
「何度も言うように、いずれ分かる」
うぐぐ……とここでオレが苦い顔をするのも含めて、いつもの流れであった。

「いいじゃないか、どうせ暇なんだろ？　俺が相手になってやるから」
オレとレオンの言い合い（主にオレの、はたから聞けば微笑ましい声の怒声が中心だが）を見ていた勁也が、ぽんとオレの肩に手を置きながら言った。
「……まあ、いいけどさ」
オレもしぶしぶ了承する。オレも自分で分かっているからだ。
今のオレは全然強くない、ということを。

確かにオレは、黒塚の自作自演の騒動の結果、フルミナ・レーゲンも使っていたという身体能力向上系の移動術『光速』が使えるようになった。
ただその『光速』も、長時間持続させることは出来ないし、まだオレもその『光速』に慣れてないせいか、細かい制御が出来ないでいた。ただ直線距離をすさまじいスピードで走り抜けるだけ。あの怪しい仮面の男――後に黒塚と判明したが――と戦った当初は、なにか神経が研ぎ澄まされたような感じで、細かい制御も出来ていたのだが……。あの時の様な感触はあれが最初で最後であった。
そんなのだから――

†††††

「そんなのだから、お前の動きは読みやすいんだよ」
ばし、とオレの右腕が勠也につかまれる。
「あ――」
オレは腕をつかまれた後、へた、としりもちをついた。
オレと勠也は今、生徒会室とは違う場所に移動していた。
その場所は……地下だった。
何故か生徒会室には、隠し扉みたいなものがある。
その先には、いくら強力な魔法を行使してもびくともしない強固な結界が張り巡らされている、ただっ広い地下空間が存在していた。
なんでこんなものがと最初は思ったが、聞いてみると納得した。
今の世の中、魔法は日陰者である。秘密裏に訓練すると言っても、表の世界には場所がないのである。
それ故に、このような常人の目が届かない隔離された空間が存在するというわけだ。
……こんな空間、地下に掘っておいて大丈夫なのかよ……そう思わなくもないが。
その地下空間の、冷えた床に女の子座りしながら、オレは息を切らしつつ勠也を見上げた。
「し、仕方ない、だろ。いきなり視界が、変わるんだから……」
オレの返答に、勠也は眉をひそめる。

「それはそうだろうが、慣れろ。その感覚はお前にしか分からないんだからな。……あと、もう一つ言わせてもらうとな……」
言いつつ、勠也はオレの腕をぐいっと引き上げた。オレはその反動を借りて、よっこらせと立ち上がる。

「お前、剣の扱いが雑すぎる。雑なら雑なりに、もっと当てる努力をしろ。全然当たらない軌道を通っていたぜ？　ちゃんと素振りしているのか？」
「い、一応……してるけどさ。なんかこう、この年で木刀ぶんぶん振り回すのが、は、恥ずかしいというか……」
オレは右手の人差し指で頬をぽりぽりとかく。その手には、オレの身長に合うように少し短めな木刀が握られている。同じものが左手にも握られている。
いうなれば、オレは双剣使いであった。

「振り回すからだろうが。ちゃんと振れば、それなりに見栄えはするぞ」
「それは、お前が普通に木刀一本しか使わないからだろ？　オレなんて……木刀二本とか、お遊びにしか見えねえよ。なんでオレは双剣使わなきゃいけないんだよ？」
「お前自身も賛成してただろ。それに……双剣、いいじゃねえか。その身体の真の持ち主は、嵐のように敵を切り刻んだらしいぞ？」
「そりゃ、そうだけど……」
オレが双剣を使う理由は、まさにそれだった。

フルミナ・レーゲンの体と能力を引き継いでいるから。

最初にオレに双剣を推したのは、レオンであった。それに黒塚が賛成し、そして過去のオレも『あー、双剣格好いいかもー』なんて能天気なことで賛成したので、その日からオレは双剣を使えるように訓練をし出したのである。

ところが、これが意外と困難な武器であることが、数日で発覚した。

まず第一に、力が入らない。
片手で重いものを長時間扱うので、いくら魔法で身体能力を上げたところで、握力がもたないのだ。

第二に、攻撃が軽い。
片手剣を二本扱うのだ。そのためには、どうしても一本一本の武器を軽くせざるを得ない。それにともなって、武器の重さを利用した威力の高い攻撃ができないのである。

そして一番は、なんといっても両手のコンビネーションの難しさだ。うまく両手の剣を扱えないで下手な姿勢になると、かえって身を危険にさらすことになる。しかしうまく扱うと、小回りの良さからくる反応不可能な連撃に加え、多方向からの攻撃を弾く鉄壁の防御を得ることができる。まさに使用者の力量とセンス、そしてなにより努力が問われる武器だ。

オレは何度も別の武器にしたいと申請したが、いざ他の武器を扱うと、なにか違和感を覚えるのだった。

なんだかんだいっても、オレがしっくりくると感じる武器は、双剣だけのようだ。
「……だけど、なんかこう……うまく扱えないんだよな。体はフルミナので、実際はオレが操ってる形だから、やっぱりオレ自身のほ

うに才能がないってことなのかな？」
オレが軽く双剣を振りながら若干沈んだつぶやきをすると、勠也がさも当然のように言った。
「そんなことはないだろ。俺はお前には双剣を扱う才能はあると思うぜ」
「……なんで？」
オレが信じられないという表情で見ると、勠也は「だってよ……」と言いつつオレの頭に手を置いた。
「お前はまだ扱い始めて二週間程度だろ？　その割には、なかなかうまい防御をしてると思うぜ俺は。攻撃のほうはさっぱりだけどな」
「……頭なでるな」
オレは褒められたのか、けなされたよく分からない勠也の発言に苦い顔をしながら、とりあえず頭にある勠也の手を払いのけた。
「ははは。そうだな、俺が思うにだが……」
そう言って勠也は、右手に持っていた木刀を後ろ手に放り投げた。木刀はくるくると勠也の背後を回転しながら場所を移し、肩越しに伸ばしていた勠也の左手にすっぽりと収まった。そのまま勠也は、左肩に担ぐように木刀をもってきた。
「お前は変に考えすぎな気がする。もっと自然に剣を振った方がいいと思うぜ？」
そしてそう言い残し、すたすたと生徒会室へ続く階段のほうに歩き出した。
「おい、それはどういう――」

「あー、ちょうどいいね。そろそろ会議始めるから上に戻ってきてねー」

オレが勠也に言葉の意味を聞こうと上げた声は、黒塚の召集の声に上書きされた。
「だとよ、行こうぜ雷牙」
「あ、おう……」
オレは少し疲労の残った足を動かし始めた。
そうして勠也に小走りで追い付いて再び訊く。

「どういう意味だよ、今のは？」
「言葉通りの意味だ。お前はいろいろと雑念を持ちながら剣を振っている気がしてな」
「なんだよ、それ？」
「それは自分で考えな」

話は終わりだという風に、勠也がそっけなく答えた。オレは歩幅の関係上、徐々に遠くなる勠也の背中を見ながら、よく分からないと首をかしげた。

「……もっと自然に剣を振れ、ねえ」

つぶやいてみたが、いまいち言葉の正体がつかめなかった。

02（後書き）

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8324w/

虹色の電撃姫～いやだからオレは……～

2011年10月10日01時18分発行